

論語集註 後藤点 zǐ hǎn dì jiǔ
子罕 第九 凡三十章

○子罕言利與命與仁 zǐ hǎn yán lì yǔ mìng yǔ rén 子罕(まれ)に利と命と仁とを言ふ。罕少也。程子曰、計利則害義。命之理微、仁之道大。皆夫子所罕言也。罕は少なり。程子の曰く、利、計れば則ち義を害す。命の理は微、仁の道大なり。皆夫子罕に言ふ所なり。

■罕は説文に、「网(あみ)なり、网に従ひ、干聲」とあり、干は長い柄。網をのせた狩猟用の車を罕車、天子の儀仗に用いる網飾りのある旗を罕罽(かんひつ)という(字統)。天子の用具で滅多に用いない貴重なものから希(まれ)と通ず。■利は説文に、「銛(するどき)なり。刀に従ふ。和して然る後に利(よ)ろし。和の省に従ふ。『易』に曰く、『利は義の和なり』。耒が古文の利」とある。利は禾(穀物)をリ(鋭い刀)で収穫する形。易の元亨利貞(乾卦、乾は、元「おほ」いに亨「とほ」りて貞「ただし」きに利「よ」ろし)の利で“よろし”となる。利を「義の和」として積すのが伝統であった。人世の利と天道の利を区別し、天道の利と考へた。一方、憲問篇に、今の聖人は、「利を見て義を思ひ、危を見て命を授く」とあり、利を利益とする。朱熹は義を害すを利とした。利と命と仁が並べ置かれ、利益と天命と仁とすれば、利益だけがすわりが悪い。「子罕に利を言ふ、命と仁と」「子罕に利を言ふ、命と與にす、仁と與にす」とよまれることもある。■何晏は、「罕は希なり。利は義の和なり。命は天の命なり。仁は行の盛なるなり。能く之に及ぶこと寡し、故に希と言ふなり」とした。■皇侃は、まず全章に先立って、「子は孔子なり。罕は希なり。此篇の明時に感者既に少し、故に聖應亦希なり。前に次ぐ所以は、富貴を外遠(遠く離れ)し既に糝糠(ひこう; しいなどぬか、役に立たない)と爲し、故に凝寂(ぎょじゃく; 静かに心をこらす)に還反(立ち返り)し以て言ふ所希なり。故に子罕は太伯を次ぐなり」と前置きした。この章については、「子は孔子なり。罕は希なり。言は説なり、利は天道元亨(げんこう; 生み育て)萬物に利(よろ)しき者なり。與は言語、之を許與す(許し与ふ)なり。命は天命、夭壽の目に窮通するなり。仁は惻隱、衆を濟ふ行の盛なる者なり。弟子、孔子を記して教化を爲す所希に言ふ及び人に許與する所希なる者なり。然りとする所以は、利は是れ元亨利貞の道なり。百姓日に用ひて知らず。其の理は玄絶(奥深くへだたる)、故に孔子言ふは希なり。命是れ人天に稟(さずか)りて生る、其の道測り難し。又好悪同じからず、若し人に逆向し説かば、則ち人情を傷動す。故に孔子人と説くは希なり。仁是れ行盛なる、人に中(あた)りて能(よ)くする所に非ず。故に亦説きて人に許與すこと希なり。然れども希は都(みな)絶つ稱に非ず。亦時有りて人と言ふなり。周易文言是れ利の時を説くなり。伯牛亡きの命を謂ふか。及び由(子路)が若き、其の死然るを得ずを云ふ。是れ人と命を説くなり。又孟武伯、子路・冉求の屬に仁を問ふ。子の曰はく「知らず」。及び楚の令尹陳文子、仁を得を云ふ。竝びて是れ人仁に與らず。而るに顔回三月仁に違はずを云ふ。及び管仲其の仁に如くを云ふ。則ち是れ人と仁時を説くなり。故に子罕に利と命と仁を言ふと云ふ。

「罕者希也。利者義之和也」云ふは、即ち文言を引くなり。義は宜なり。和は無害なり。凡そ人世の利、彼を利せば則ち此を害す。義和に非ず。若し天道の利、利して害無し。故に萬物、宜を得て和す。故に義の和と曰ふ。

「命者天之命也」云ふは、人天に稟りて生る、故に天命と云ふ。中庸に曰く、「天命、之(これ)性を謂ふ、是なり」。

「仁者行之盛也」云うは、仁義禮智信の五つは、竝びて是れ人の行、而して仁は五者の首に居り主として生ず、故に行盛なるを曰ふ。

「寡能及之」云ふは、天道は微妙、天命は深遠、仁道は盛大、人能く知及ぶ所に非ず。故に能くこれに及ぶこと寡しと云ふ。

「故希言也」云ふは、世人爲して及ぶこと寡し、故に孔子亦言ふこと希なり」。■邢昺は、何晏を引き、「『釋詁』に云く、『希は罕なり』。轉互し相訓ず。故に罕は得て希と爲なり。『利者義之和也』を云ふは、『乾卦・文言』の文なり。言ふは、天能く庶物に利しく益し。物をして各(おのおの)其の宜を得て和同せしむなり。此に云ふ利は、謂君子萬物に利しく益し、物をして各其の宜を得、以て義に和合すに足り、天の利を法(のり)さしむ。『命者天之命也』を云ふは、天、命にして人に生ず所の者を謂ふなり。天、本(もともと)體無く、亦言語の命無し。但に人感じ自ら然り而して生ず。賢愚、吉凶、窮通、夭壽有り、天の命を付す、遣(つかは)してこれを然らしむが若し。故に天の命と云ふなり。『仁者行之盛也』を云ふは、仁者は人を愛し以て物に及ぼす。是れ善行の中、最盛なる者なり。此の三者を以て知に中る、以下能く知に及ぶこと寡し、故に孔子言ふこと希なり」とした。

dá xiàngdǎngrényuē dà zāi kǒng zǐ bó xué ér wú suǒ chéng míng
 ○達巷黨人曰大哉孔子博學而無所成名 達巷黨の人曰く、大なるかな孔子。博く學びて名を成す所無し。達巷黨名。其人姓名不傳。博學無所成名、蓋美其學之博、而惜其不成一藝之名也。達巷は黨の名。其の人の姓名傳はらず。博く學びて名を成す所無しは、蓋し其の學の博きを美(ほ)めて、其の一藝の名を成さざることを惜しむなり。

■孔子を聖人・君子とする立場があり、大哉を美め辞とするのが通釈で、その流れ以外の釈はなされない。しかし、博く學びて名を成すところ無しは批判の言。達巷といふは達人の巷(ちまた)であり、この党の人は、名を成さないことに欠陥をみたのであろう。朱熹は、聖人は人にそうと知られずして、民をいつのまにか教化する存在であり、この達巷の人はそこが分かっていないと批判した。同篇以下にみえるごとく、孔子は多能、多芸を君子の資質とせず、自身の貧窮の境遇で多能、多芸たらざるを得なかったことに“こだわり”があり、謙るところがあった。若い孔丘は御で身を立てようとしたが、十五歳にして、学に志した。私が御で身を立てれば、御で名を成したことだろう、その方がよかったかね?と弟子にすました顔でもしたのではないか。■何晏は、「鄭玄曰く、達巷は黨の名なり。五百家黨を爲す。此の黨の人、孔子の博學道藝を美む。一名成さざるのみ」を引いた。■皇侃は、「五百家黨を爲す。黨に各(おのおの)名有り。此の黨の名は達巷、達巷の黨の中の人、孔子の道大なるを美む、故に曰く、大なる哉、廣く博はるなり。大なる哉孔子と言ふは、廣く道を學びて藝周(あまね)く遍(あまね)し、一一而して稱す可らず、故に、名を成す所無きを云ふ。猶、堯の徳蕩蕩として民能く名づくこと無きが如し。故に王弼が曰く、譬ふに、猶和樂八音に出、然して八音其れ名づくに非ずがごときなり。江熙が曰く、言ふは、其れ彌六流を貫きて、一藝を以て名を取る可らず、故に大と曰ふなり」とした。■邢昺は、これらを受けて、「此の章、孔子の道藝、該(そ)の博きを論ず」とした。

zǐ wén zhī wèi mén dì zǐ yuē wú hé zhí zhí yù hū zhí shè hū wú zhí yù yǐ
 子聞之謂門弟子曰吾何執執御乎執射乎吾執御矣 子之を聞きて、門弟子に謂りて曰はく、吾何をか執らん。御を執らんか、射を執らんか。吾は御を執らん。執專執也。射御皆一藝、而御爲人僕。所執尤卑。言欲使我何所執以成名乎。然則吾將執御矣。聞人譽己、承之以謙也。○尹氏曰、聖人道全而徳備。不可以偏長目之也。達巷黨人、見孔子之大、意其所學者博、而惜其不以一善得名於世。蓋慕聖人而不知者也。故孔子曰、欲使我何所執而得成名乎。然則吾將執御矣。執は專執るなり。射御は皆一藝にして、而して御は人僕爲り。執る所尤も卑し。言ふは、我をして何の執る所に以て名を成すをしからしめんと欲すや。然れば則ち吾將に御を執らん。人の己を譽むを聞きて、之に承くに謙を以てす。○尹氏が曰く、聖人、道全くして徳備はる。偏長を以て之を目(なづ)く可からず。達巷黨の人、孔子の大なるを見て、意ふに其の學ぶ所の者博くして、而して一善を以て名を世に得ざることを惜しむ。蓋し聖人を慕いて知らざる者なり。故に孔子の曰はく、我に何の執る所にして名を成すこと得さしめんと欲するや。然れば則ち吾將に御を執らんか。

■何晏は、「鄭玄曰く、人之を美むを聞きて、之に承くに謙を以てす。吾は禦を執らんは、六藝の卑きに名あらん

と欲す」を引いた。■皇侃は、「孔子、達巷人が己を美むを聞きて、故に弟子を呼びてこれを語る。彼既に我の博學を美む、而して我、道藝に於て何んぞ持執する所か、自ら謙（へりくだ）らんと欲すなり」、「既に己の不多を謙らんと欲す、故に六藝の下を陳（の）ぶは、以て自許すなり。言ふは、吾執る所、御及び射に執るか。御は車を御す者なり」、「射御を以て自許すに合はんとすも、又太多を嫌ふ。故に又射を減し而して吾は御者を執ると云ふ」、「六藝は、一に五禮を曰ひ、二に六樂を曰ひ、三に五射を曰ひ、四に五馭を曰ひ、五に六書を曰ひ、六に九數を曰ふなり。今云ふ執御、御は禮樂射に比して卑と爲すなり」とした。■邢昺も、これらを受けて、「是（御）は六藝の卑なるもの、孔子六藝の卑に名あらんと欲す。故に『吾は禦を執らん』と云ふ。謙の甚し」とした。

zǐ yuēmámǎn lǐ yě jīn yě chúnjiǎn wú cóngzhòng
 ○子曰麻冕禮也今也純儉吾從衆 子の曰はく、麻冕（まべん）は禮なり。今純（いと）は儉なり。吾は衆に從ふ。麻冕緇布冠也。純絲也。儉謂省約。緇布冠、以三十升布爲之。；升八十縷、則其經二千四百縷矣。細密難成。不如用絲之省約。麻冕は緇（黒く染めた）布冠なり。純は絲なり。儉は省約を謂ふ。緇布冠は、三十升の布を以て之を爲る。升は八十縷（る；細い糸）、則ち其の經は二千四百縷なり。細密にして成り難し。絲を用ゐるの省約なるに如かず。

■純は説文に、「絲なり」とあり、絲は説文に、「蠶（蚕）吐く所なり」とあり繭、絹糸のこと。養蚕が盛んとなり、麻糸より簡単に得られ、儉約することができた。■何晏は、「孔安国曰く、冕は、緇布の冠なり。古へは績麻は三十升の布以てこれを爲る。純は絲なり。絲成り易し、故に儉に從ふ」を引いた。■皇侃は、「禮は周禮を謂ふなり。周禮に六冕有り。平板を以て主と爲す。而して三十升の麻布の衣板を用ゐ、上玄下纁（そひ；浅紅色）、故に麻冕を禮と云ふ」、「今謂ふは周末の孔子の時なり。純は絲なり。周末に復卅升の布を用ゐず、但に織絲これを爲す。故に今と云ふ」、「三十升の布、用功巨にして得ること多難、得難き則ち奢華と爲す。而して織絲成り易し。易成則ち儉約爲り。故に儉と云ふ」、「衆は周末の時の人を謂ふなり。時既に人人、易に從ひて絲を用ふ。故に孔子の曰はく、吾亦衆に從ふ。これに從ふ所以は、周末、事毎に奢華にして、孔子、寧ろ奢を抑へ儉に就くを欲す。今幸に衆共に儉を用ふを得、故に孔子、これに從ふ」、「冠冕、名通ずなり。且つ周家の委貌冠（HP）は、亦卅升の緇布を用ふ」とした。■邢昺は、これらを受けて、冠、冕について、士冠禮、を引いて説明するが日本人には馴染みがない。■後漢書、「輿服下」によれば、「鳥獸に冠角髯（口髯）胡（顎鬚）の制有るを見て、遂（を）ひて冠冕纓（結び飾り）蕤（ひらひら垂れるもの）を作り、以て首（あたま）飾と爲す」とあり、これが冠の始まりである。成人すれば冠を着用する。冠は弁（礼装用）や冕（祭祀用）の総称で、冕冠、長冠、委貌冠、皮弁冠、爵弁冠、通天冠、遠遊冠、高山冠、進賢冠、法冠、武冠、建華冠、方山冠、巧士冠、却非冠、却敵冠、樊會冠、術氏冠、鶡冠などと身分や官職、時節に応じて使い分けられた。冠をせず黒い髪の毛のままの頭をしているものは黎民（れいみん、頭が黒い民）と呼ばれ、一段と低い階層の人間とみなされた。礼記、「冠義」に、「冠は禮の始なり。是の故に古へは、聖王冠を重ず。古へは、冠禮は日を筮（うらな）ひ賓を筮ふ、冠事を敬す所以。冠事を敬すは禮を重ず所以」とある。

bài xià lǐ yě jīn bài hū shàng tài yě suī wéi zhòng wú cóng xià
 拜下禮也今拜乎上泰也雖違衆吾從下 下（しも）に拜するは禮なり。今上（かみ）に拜するは、泰（おご）れるなり。衆に違ふと雖も、吾は下に從はん。臣與君行禮、當拜於堂下。君辭之、乃升成拜。泰驕慢也。○程子曰、君子處世、事之無害於義者、從俗可也。害於義、則不可從也。臣、君と禮を行へば、當に堂下に拜すべし。君之を辭すれば、乃ち升りて拜を成す。泰は驕慢なり。○程子の曰く、君子の世に處する、事義に害無き者は、俗に從ひて可なり。義に害あるは、則ち從ふ可からず。

■どうやら宴において、君が臣に堂上で酒を賜ひ、臣がそこで拝するのが流行していたようだ。本来は、堂下に降り、拝し、再び堂に上がり拝すべしとして、孔子はひとり堂下に降りたようだ。気まづい雰囲気となったことであろう。■何晏は、「王肅曰く、臣の君と禮を行へば、下に拜して然を後に升りて禮を成す。時の臣驕泰なり。故に上に拜

す。今下に従ふは、禮の恭なり」を引いた。■皇侃は、「今謂ふは周末、孔子の時なり。上は堂上を謂ふ。泰は驕泰なり。時周末に君臣飲燕すに當り、臣、君の酒を賜ふを得て、復た下堂せず、但に堂上にちて拜す。故に今拜すこと上を泰と云ふ。下堂せず拜す、是れ臣驕泰に由る。故に泰と云ふ」、「當時、皆禮を違へ而して上に拜す者衆し。孔子、上に拜すに従はず、故に衆に違ふと雖と云ふ。衆に違ひて舊禮に従ひ下に拜す。故に、吾は下に従ふと云ふ」、「燕義（禮記）曰く、君擧げて賓に旅し（巡る）、君爵（酒器）を賜ふ所に及び、皆降りて再拜稽首す。升りて成拜す。臣禮明らかなり。燕義の賓を案ずに、皆是れ臣なり。臣、君に旅を得て爵を賜はるに及び、下堂に降りて再拜す、再拜竟りて、更に升堂又再拜す、成拜爲すを謂ふ。成拜は堂下の拜に向在す。禮未だ然成らざるが若し。故に更に升堂し以てこれ成る」、「周末の時此の如し」、「孔子下の禮に従ふを欲す、是れ恭を爲す」とした。■邢昺は、これを受け、「燕禮（儀禮）」により、「公坐して大夫觶（し；獸角の酒杯）を媵（よう；送；贈給）す所を取りて、興（た；立）ちて以て賓に酬（返礼）す。賓西階の下に降り、再拜稽首す。公、小臣に辭を命じ、賓升りて成拜す」とし、「鄭玄の注に、升りて成拜す、複再拜稽首す。先時君これを辭す。禮に未だ然成らざるが若し」とした。また、「覲（きん；まみへる）禮」により、「天子、侯氏に賜ふに車服を以てす。諸公、篋（きょう）服を奉ること、其の上に命書すが如し。西階東面より升り、大史氏右。侯氏升りて西面に立つ。大史命を述ぶ。侯氏、兩階の間に降り、北面し再拜稽首す。升りて成拜す」を引き、「皆是れ臣の君と禮を行ふ。下に拜し、然して後に升りて禮を成す」とした。

○子絶四母意母必母固母我 子、四つを絶つ。意（い）母（な）く、必（ひつ）母（な）く、固（こ）母（な）く、我（わ）母（な）し。絶無之盡者。母史記作無是也。意私意也。必期必也。固執滯也。我私己也。四者相爲終始。起於意、遂於必、留於固、而成於我也。蓋意必常在事前、固我常在事後、至於我又生意、則物欲牽引、循環不窮矣。○程子曰、此母字、非禁止之辭。聖人絶此四者、何用禁止。張子曰、四者有一焉、則與天地不相似。楊氏曰、非知足以知聖人、詳視而默識之、不足以記此。絶はこれ無くして盡くる者。母は史記に無と作る、是なり。意は私意なり。必は期必なり。固は執滯なり。我は私己なり。四つの者は終始を相爲す。意に起こり、必に遂げ、固に留まり、我に成る。蓋し意必は常に事の前に在り、固我は常に事の後に在り。我に至りて又意を生ずれば、則ち物欲牽（ひ）き引（ひく）に、循環して窮まらず。○程子の曰く、此の母の字は、禁止の辭に非ず。聖人此の四者を絶つ、何ぞ禁止を用ゐん。張子が曰く、四つの者、一つ有れば、則ち天地と相似ず。楊氏が曰く、知以て聖人を知るに足り、詳らかに視て黙して之を識るに非ずんば、以て此を記すに足りず。

■絶は絶で、糸と刀と「からなり、説文に、「糸を斷つなり」とある。■母は、説文に、「これを止（や）むなり」とある。絶や母には断ち切って止めるといふ決意がある。禮により（意によらず）、道があれば行ひ、道がなくなば去る。因習に囚はれないが、述べて作らずを旨とする方針であろう。■何晏は、それぞれに、「道を以て度と爲す。故に意に任（まか）せず」、「之を用ふれば則ち行ひ、之を舍（すつ）れば則ち藏（かく）る。故に自（おのづか）ら専（もは）ら必（ひつ）とすること無し」、「可無く不可無し。故に固（かた）く行ふこと無し」、「古を述べて自（みづか）ら作せず。群萃（ぐんすい；群集）に處（をり）て自ら異ならず。唯だ道、是れ従ふ。故に其の身有らず」とした。■皇侃は、まず、「絶は無なり。明らかに孔子、聖人にして此下四事無し。故に四を絶つと云ふ。無と云はずして絶と云ふは、世人これを言ひて似るに據る。四事、世人未だ能く絶たず。而して孔子これを絶つ。故に絶と云ふ。故に顔延之（384~456；宋の詩人）曰く、人に四つを絶つ者を謂ふ」とし、それぞれに、「一なり、此れ聖人の心を謂ふ。凡人に滯有り。故に動靜・委曲（詳細）自ら其の意に任せ用ひて、聖人無心、泛（う；浮）くこと舟を係（つな）がざるが若し。豁（かつ；開けっぴろげ；度量が広い）寂は同道す。故に意無し」。「二なり、此れ聖人の行化の時を謂ふ。物求めば則ち趣（ゆ）き應（こた）ふ、必を抑（おさ）ふ所無し。故に互郷（の童子に学を）進（すす）めてこれに與（とも）にす、是なり。必を抑ふ所無く、無意に由る。故に能く化を爲して必無し」、「三なり、此

れ聖人、己が物に應へて行化する故なり。固は執守堅固を謂ふ。聖己が物に應ふと雖も、物得て行ふこと能はざるが若し、則ち聖亦これを追ひて固執せず、三隅に反へらず則ち是を復たせず。亦無意に由る。故に能く固無し」、「四なり、此れ聖人、教を行ひ功德身に成りて退く迹（足跡）なり、聖人、迹を晦（くらま）す。功遂げて身退く。恆に自異ならず。故に我無し、亦無意に由る。故に能く我無し」、として「萃は聚なり。或ひと問ひて曰く、孔子、或は孺悲（広い意味で孔子の弟子）を拒む、或は天徳を予に生ぜしむ、何ぞ得て無我と云ふか。答へて曰く、聖人、教を作して機に應ず、一に準（なぞら）ふ可からず。今其の迹を爲して茲（こ）の地を涉（わた）り、物嫌ふ所と爲し、心に恐ること實に此の如し。故に正に此の四つを絶つを明らかにし以て本の地見るなり」と締めくくった。■邢昺は、「此の章、孔子の四事を絶ちて去るを論ず。常人と異なる。母は不なり。我は身なり。常人、心を師とし徇ひ惑ふ。自（みづから）、己が意に任す。孔子、道を以て度と為す。故に意に任せず。常人の行藏は隨時用舍（捨）すること能はず。自を好みて必を専にす。惟だ孔子、これを用ひて則ち行ひ、これを舍（す）てて則ち藏（かく）れ、必を専にせず。常人の情、可はこれに與（あづか）り、不可はこれを拒む。其の行ふ所堅固なるを好む。孔子、則ち可無く、不可無し。行ふに固からず。人多く製作し自異り、以て其の身を擅（せん；勝手きままに）す。孔子、則ち古を述べて自作らず。群衆萃聚に處りて。和光同塵し、而して自異ならず。故に其の身を有さず」とした。

○子畏於匡 zǐ wèi yú kuāng 子、匡（きょう）に畏（おそ）る。畏者有戒心之謂。匡地名。史記云、陽虎曾暴於匡。夫子貌似陽虎。故匡人圍之。畏は、戒心の謂有り。匡は地の名。史記に云く、陽虎曾て匡に暴す。夫子、貌を陽虎に似たり。故に匡人之を圍む。

■畏の解釈が分かれた。孔子一行が兵に囲まれたことを恐れた。これを記した人、その場の人が恐れたのみで、孔子は恐れなかったとする。畏は心服、戒心であり、孔子が天命を自覚しておられたことを畏（つつし）んでおられたとする。孫綽（東晋文人）は、畏に道家風の積をしたようであるが、筆者には分からない。■何晏は、「包氏曰く、匡人誤りて夫子を圍む、陽虎と以為らくと。陽虎曾て匡に暴す。夫子の弟子顔克時に又虎と俱に行く。後に克、夫子の為に御し、匡に至る。匡人相ひ與に共に克を識る。又夫子の容貌、虎と相ひ似たり、故に匡人、兵を以てこれを圍む」を引いた。■皇侃は、「心服を畏と曰ふ。匡は宋の地名なり。時に匡人、誤りて兵を以て孔子を圍む。故に孔子、同じ物にしてこれを畏る、孫綽曰く、匡の人に畏る説、皆衆家の言、而して畏の名を釋さず、書を解す理、漫爲り（深い考えがない）。夫れ體神知幾、玄定安危は、兵百重に圍むと雖も、安きこと太山の若し。豈に畏ること有りや。然りと雖も兵事は阻險にして、常情畏る所。聖人無心、故に即ち物を以て畏を畏と爲すなり。誤りてこれを圍む由を釋すものなり」とした。■邢昺は、「此の章、孔子の天命を知るを記すなり。子、匡に畏るは、匡人兵を以て孔子を圍むを謂ふ。記者は衆情を以てこれを言ふ。故に『子、匡に畏る』と云ふ。其の實は、孔子、畏る所無きなり」とした。

易經、繫辭下傳 「知幾其神乎」

子の曰はく、幾を知るは其れ神（明）か。君子は上交して諂（へつら）はず。下交して瀆（けが）れず。其れ幾を知るか。幾は動の微にして、吉の先ず見（あら）はる者なり。君子は幾を見て作（おこ）り、日を終ふるを俟（ま）たず。・・・君子は微を知り彰を知る。柔を知り剛を知る。萬夫の望なり。

易經、繫辭下傳 「危者、安其位者也」

子の曰はく、危は其の位に安ず者なり。亡は其の存を保つ者なり。亂は其の治を有す者なり。是の故に、君子は安くして危を忘れず。存して亡を忘れず。治まりて亂を忘れず。是れを以て身安くして國家保つ可きなり。

yuēwénwáng jì mòwénbú zài zī hū
曰文王既沒文不在茲乎

曰はく、文王既に沒したれども、文茲（ここ）に在らずや。道之顯者謂之文。蓋禮樂制度之謂。不曰道而曰文、亦謙辭也。茲此也。孔子自謂。道の顯たるは、之を文と謂ふ。蓋し禮樂制度の謂。道と曰はず而して文と曰ふは、亦謙辭なり。茲は此なり。孔子自ら謂ふ。

■孔子は天命を得た文王の文（皇侃は聖徳、文章、朱熹は禮樂制度、道とする）を継承している自負があった。■何晏は、「孔安国曰く、茲は此なり。言ふは、文王、已に没したりと雖も、其の文見はれて此に在り。此は自ら其の身を謂ふ」を引いた。■皇侃は、「孔子、得て圍まれ自ら己が徳を説く。匡人をして己を知らしめんと欲す。茲は此なり。孔子、自ら己を此とす。言ふは、昔文王の聖徳、文章に有り。教を以て天下を化す。文王、今既に已に没したり、則ち文章、宜しく須べからく人、傳ふべし、文章を傳ふは、我に非ずして誰か。故に曰はく、文王既に没したれど、文茲に在らずや。言ふは、此れ我當にこれを傳ふべし。其の身は夫子の身なり」とした。■邢昺は、「孔子、弟子等を以て畏懼せしむ。故に此の言を以てこれを論す。茲は此なり。言ふは、文王已に死すと雖も、其の文豈に見はれて我が此の身に在らずや。言ふは、其の文見はれて我が此の身に在るなり」とした。

tiānzhījiāngsàng sī wén yě hòu sǐ zhě bù dé yǔ yú sī wén yě tiānzhīwèisàng sī wén yě kuāngrén qí rú yǔ hé
天之將喪斯文也後死者不得與於斯文也天之未喪斯文也匡人其如予何 天の將に

斯の文を喪（ほろ）ぼさんとするや、後死（こうし）の者斯（こ）の文に與（あづか）ることを得ざる。天の未だ斯の文を喪ぼさざるや、匡人（きょうひと）其れ予（わ）れを如何。喪與竝去聲。○馬氏曰、文王既沒。故孔子自謂後死者。言天若欲喪此文、則必不使我得與於此文。今我既得與於此文、則是天未欲喪此文也。天既未欲喪此文、則匡人其奈我何。言必不能違天害己也。喪 sàng 與 yǔ は竝去聲。○馬氏が曰く、文王既に沒す。故に孔子自ら後死者の者と謂ふ。言ふは、天若し此の文を喪ぼさんと欲せば、則ち必ず我をして此の文に與ることを得さしめず。今我既に此の文に與ることを得られれば、則ち是れ天の未だ此の文を喪ぼすを欲せざるなり。天既に未だ此の文を喪ぼすことを欲せざる、則ち匡人其れ我を奈何。言ふは、必ず天に違ひて己を害すること能はず。

■この事件は、弟子の顔克（刻）が嘗て陽虎の御者として匡に不法侵入して悪を為したことに遠因があった。今回は顔克が孔子の御者として匡に入るに、嘗て不法侵入した隙間のことを指し示したことを匡人が不審に思ひ拘束したところ、陽虎に似た容貌の人物（孔子）がいたことによる。衛瓘の云ふごとく人違いであることが分かれば、放免さるべきものである。下克上の申し子のごとき陽虎の為した悪が余程ひどかったのか。人違いであることが信じてもらへなかったとみえる。「文王の文が我が身に存す」といふ大言で弟子の動揺を鎮めんとした。こんなことがあって、心に秘めていたことが吹き出たのかもしれない。弟子には孔子が「命」について語ったものと強い印象が残った。■何晏は、「孔安国曰く、文王既に沒す。故に孔子自ら後死と謂ふ。言ふは、天將に此の文を喪ぼさんとすは、本もと當に我をしてこれを知らしむべからず。今、我をしてこれを知らしむは、未だ喪ぶこと欲せず」、「馬融曰く、其れ予を如何は、猶我を奈何と言ふがごとし。天の未だ此の文を喪ぼさざる、則ち我當にこれを傳ふ。匡人我を奈何と欲す。言ふは、其れ天に違ひて以て己を害すこと能はず」を引いた。■皇侃は、「既に文傳はりて我に在りと云ふ。故に更に、我殺す可らざることを説く意なり。斯の文即ち文王の文章なり。後死と孔子自ら謂ふ。夫れ生は必ず死有り、文王既に沒し、已に亦當に終るべし。但に文王已に前に沒し、則ち己は方に後に死す。故に自ら謂ひて後死を爲すなり。言ふは、天、若し將に文王の文章を喪ぼし棄てむと欲せば、則ち今、我をして已に得て知を預りてこれを識らしむに應へず」、「天今、我をしてこれを知らしむ。是れ未だ此の文を喪ぼすを欲せず。既に未だ此の文を喪ぼすを欲せず、己にしてこれを傳へしむ。則ち匡人豈に能く天に違ひて我を害すか。故に曰はく、予を何如。衛瓘（えいかん；220年-291年西晋の軍人・大臣）曰く、若し孔子自ら陽虎に非ずと明らかにせば、必ず之を詐と謂ふ。晏然として是の若しと言ふ。匡人は是れ陽虎に非ずと知れば、賢を害すを懼れ、免す所以なり。江熙（東晋末博士；集解論語十卷）云く、言ふは、文王の道、後代の軌と爲る。己、未だ得て上天の明と述べず、必ず

没せしめず」とした。■邢昺は、これらを踏襲し、これらの注は司馬遷の「孔子世家」の記述「孔子衛を去る。將に陳に適く。匡を過ぐるに、顔克、仆（御者）と為り、策を以てこれを指して曰く、『昔日吾此に入る、彼の缺に由るなり』。匡人これを聞き、魯の陽虎と以為（おも）ふ。陽虎嘗て匡人に暴す。匡人、是に遂に孔子を止む。孔子の狀貌陽虎に類す。拘さること五日。匡人、孔子を拘すこと益（ますます）急し、弟子懼る。孔子の曰はく、『文王既に没して、文、茲に在らずや』。」によるとした。

tài zǎi wèn yú zǐ gòngyuē fū zǐ shèngzhě yú hé qí duōnéng yě
 ○大宰問於子貢曰夫子聖者與何其多能也 大宰、子貢に問ひて曰く、夫子は聖者か。何ぞ其れ多能なる。大音泰。與平聲。○孔氏曰、大宰官名。或吳或宋、未可知也。與者疑辭。大宰蓋以多能爲聖也。大 tài は音泰。與 yú は平聲。○孔氏曰く、大宰は官の名。或は吳か、或は宋か、未だ知る可からず。與は疑いの辭。大宰蓋し多能を以て聖と爲すなり。

■子貢は、魯の哀公の時、外交において重きをなしていた。皇侃は、これを呉の大宰嚭との交渉の際に起こった会話とみなした。聖人、君子といふは、徳を以て多能の者を用ふことのできる者とされ、自ら多能は用ゐらるべき者とされた。■何晏は、「孔安国曰く、大宰は大夫の官の名。或は吳、或は宋。未だ分つ可らず。孔子の小藝に多能なるを疑ふ」を引いた。■皇侃は、「太宰、孔子を聖と聞く、又孔子を多能と聞く。而して其の心、聖人は大に務め應（まさ）に細碎（こまごま）多能たるを疑ふ。故に子貢に問ひて言ふ。孔子は既に聖にして、其の那（なんぞ）復（ま）た多能なるか」、「卿大夫職に冢宰有り、或は大宰と云ふ。故に是れ大夫の官を云ふ」、「既に唯だ大宰と云ひ、名氏を論ぜず。故に何人か知らず。而して呉に大宰嚭（ひ、伯嚭～前473年？）有り。宋に大宰華督（かたく、華督～前682年）有り。故に未だ分つ可らずと云ふ。然るに此れ應に是れ吳臣とすべし。何を以て之を知る。魯の哀公七年に、公は鄆（しょう）で呉に會し、呉人は百牢を徵す。子貢をして大宰嚭に辭さしむ。十二年に、公は橐臯（たくこう）で呉師に會し、呉子は大宰嚭をして盟に蒞（臨席）すを請はしむ。公は欲さず、子貢に對（こた）へしむ。將に恐るらくは此の時、大宰嚭、子貢に問はむとすなり。且つ宋の大宰督の去ること孔子の世に遠く、或は其れ後世に至りて論ぜざる所のみ」とした。■邢昺は、これらを踏襲し、「此の章は孔子が小藝の多きを論ず」とした。

zǐ gòngyuē gù tiānzòngzhī jiāng shèng yòu duōnéng yě
 子貢曰固天縱之將聖又多能也 子貢が曰く、固より天之を縱（ゆる）して、將（ほと）んど聖、又多能なり。縱猶肆也。言不爲限量也。將殆也。謙若不敢知之辭。聖無不通。多能乃其餘事。故言又以兼之。縱は猶肆のごとし。言ふは、限量を爲さず。將は殆なり。謙りて敢へて知らざるが若き辭。聖は通ぜざる無し。多能は乃ち其餘事。故に又と言ひて以て之を兼たり。

■縱は cóng で「従ふ」、zòng で「放つ」、縱は説文に、「緩（ゆる）やかなり。一に曰く、舍（はな）つなり」とあり、放縱のこと。从が原字で、説文に、「相ひ聴く、二人に従ふ」とし聴許の意とする、また、「隨行するなり、从彳に従ふ」とする。天が相ひ聴く、天が隨行せしむようなイメージか。子貢は、孔子が天命を自覚していたことを心得ていた。多能の聖である舜を念頭においたが、孔子がそれを憚ること、また、自を彭祖に比すことを知っており、舜の名を出さずに、天はほぼ聖、多能にして孔子を送り出したと応へたのであろうか。■何晏は、「孔安国曰く、言ふは、天固（まこと）に大聖の徳を縱す、又多能ならしむなり」を引いた。■皇侃は、「子貢、答へて曰く、孔子は大聖、是れ天の固より縱す所。又多能ならしむなり。固は故（もと）なり。將（聖）は大（聖）なり」とした。■邢昺は、これらを踏襲した。

zǐ wénzhī yuē tài zǎi zhī wǒ hū wú shào yě jiàn gù duōnéng bǐ shì jūn zǐ duō hū zài bù duō yě
 子聞之曰大宰知我乎吾少也賤故多能鄙事君子多乎哉不多也 子、之を聞きて曰はく、大宰は我を知れるか。吾少（わか）ふして賤。故に鄙事に多能なり。君子多ならんや、多ならず。言由少

賤、故多能。而所能者鄙事爾。非以聖而無不通也。且多能非所以率人。故又言君子不必多能、以曉之。言ふは、少由り賤、故に多能。而して能くする所の者、鄙事のみ。聖にして通ぜざること無きを以てするに非ず。且つ多能は人を率ゐる所以に非ず。故に又君子は必ず多能ならずを言ひて、以て之を曉す。

■孔子は、子貢の機転には言及せず、大宰が自分のことを知っていることを評価し、自分は多能であり聖ではないと誡めたのであろう。■何晏は、「包氏曰く、我少小（幼少）にして貧賤、常に自ら事を執る。故に多能にして鄙人の事を為す。君子、固に當に多能ならず」を引いた。■皇侃は、「孔子、大宰の疑を聞いて我を知れりと云ふ。則ち疑を許し我は聖に非ず、是なり」、「繆協曰く、我信（まこと）に多能、故に我を知れりと曰ふ。江熙曰く、大宰、多能非聖を嫌（うたが）ふ、故に我を知れりと云ふ。謙の意なり」、「又、我れ非聖を説く、而して多能の由の所以なり。言ふは、我は少小にして貧賤、故に多能にして麤鄙（そひ；粗雑でいやしい）の事を爲すなり」、「更に云ふ、若し聖人君子ばらば、豈に多能鄙事なるか。則ち多能ならず。繆協、曰く、君子は物に従ひ務に應へ、道達せば則ち簡に務む、簡に務まば則ち多能ならず。江熙曰く、言ふは、君子存す所遠き者は大者、應（まさ）に多能ならず」、「夔肇（らんちよう、晋の廣稜大守、高平人、夔肇、字は永初、晋尚書郎、論語義を作る）、曰く、周禮百工の事、皆聖人の作なり。明かに聖人、材を兼ね藝を修むこと人に過ぐ。是れ以て大宰、其の多能を見る。固より夫子の聖を疑ふ。子貢、曰く、固より天に將聖又多能を縦す、故に承け以て謙（へりくだ）るなり。且つ務を抑排（よくはい、押さえ退ける）し多能を以て君子と爲さずと言ふ。謂ふは、君子は當に多能ならずなり。明らかに兼才は自然に多能、多能は學ぶ所に非ず。先に道德後に伎藝とする所以のみ。多能必ず不聖と謂ふに非ず。孔子に據りて、聖人にして多能、斯れ伐柯（ぼっか）の近鑒（きんかん）なり（人が学ぶべき道は近くにあるのであって遠くに求める必要はない、それを鑑として自らを誡めることか）」とした。■邢昺は、これらを踏襲し、「大宰を『大夫の官の名』とするは、『周禮』を案ずるに、大宰は六卿の長、卿は即ち上大夫なり。故に大夫の官の名を云ふ。『或は呉、或は宋、未だ分つ可らず』と云ふは、以て當時惟に呉と宋二國の上大夫を大宰と稱す。諸國に大宰有り」と雖も、上大夫に非ず。故に『或は呉、或は宋、未だ分つ可らず』と云ふ。鄭玄、『是れ呉の大宰嚭なり』と云ふ。『左傳』哀十二年に、『公、橐皋で呉に會し、呉子、大宰嚭をして盟に尋（訪）すを請はしむ。公、欲さず、子貢をして對へしむ』、又子貢、嘗て呉に適くを以てす。故に鄭玄、是れ呉の大宰嚭なりと以為（おも）ふ」とした。

láo yuē zǐ yún wú bú shì gù yì
牢曰子云吾不試故藝

牢が曰く、子云ふ、吾試（もち）ひられず、故に藝。牢孔子弟子、姓琴字子開、一字子張。試用也。言由不爲世用、故得以習於藝而通之。○吳氏曰、弟子記夫子此言之時、子牢因言昔之所聞、有如此者。其意相近。故併記之。牢は孔子の弟子、姓は琴、字は子開、一（ある）の字は子張。試は用なり。言ふは、世の為に用いられずによりて、故に以て藝に習ひて之に通ずることを得。○吳氏が曰く、弟子、夫子の此の言を記す時、子牢、因りて言ふ。昔し聞く所、此の如き者有り。其の意相近し。故に併せて之を記す。

■若く気鋭の弟子、子張が先生からそう聞いていると述べた。聞きにくいことを聞いた弟子であった。先生の答へも簡潔で、不試故藝。■何晏は、「鄭玄、曰く、牢は弟子の子牢なり。試は用なり。言ふは、孔子自ら云く、我用ひられず、故に技藝に多能」を引いた。■皇侃は、「試は用なり。子牢は孔子の言を述ぶ。我、時（つね）に用ひられず縁（よ）る。故に得て伎藝に多學なり。繆協、曰く、此れ蓋し不多能の義の所以なり。言ふは、我若し用ひられば、將に本を崇（たふと）び末を息（や）む、純に歸し素に反（かへ）る、兼愛以て仁を忘れ、藝に遊びて以て藝を去る。豈に唯だ不多能鄙事のみ」とした。■邢昺は、これらを踏襲し、『家語・弟子篇』に云く、『琴牢は衛人なり。字は子開、一の字は張』。此れ弟子の子牢を云ふ、當に是のみとすべし」とした。

zǐ yuē wú yǒu zhī hū zāi wú zhī yě yǒu bǐ fū wèn yú wǒ kōng kōng rú yě wǒ kòu qí liǎng duān ér jié yān
○子曰吾有知乎哉無知也有鄙夫問於我空空如也我叩其兩端而竭焉

子の曰はく、吾知る事有るや、知る事無し。鄙夫有り、我に問ふ、空空如たり。我其の兩端を叩いて竭くす。叩音口。

○孔子謙言、己無知識。但其告人、雖於至愚、不敢不盡耳。叩發動也。兩端猶言兩頭。言終始本末、上下精粗、無所不盡。○程子曰聖人之教人、俯就之若此。猶恐衆人以爲高遠而不親也。聖人之道、必降而自卑。不如此、則人不親。賢人之言、則引而自高。不如此、則道不尊。觀於孔子・孟子、則可見矣。尹氏曰聖人之言、上下兼盡。卽其近、衆人皆可與知。極其至、則雖聖人亦無以加焉。是之謂兩端。如答樊遲之間仁知、兩端竭盡無餘蘊矣。若夫語上而遺下、語理而遺物、則豈聖人之言哉。叩 kòu は音口。○孔子、謙りて言ふ、己（おのれ）知識無し。但に其れ人に告ぐこと、至愚なりと雖も、敢へて盡くさずんばあらざるのみ。叩は發動なり。兩端は猶兩頭と言ふがごとし。言ふは、終始本末、上下精粗、盡くさざる所無し。○程子の曰く、聖人の人を教へる、俯して之に就くこと此の若し。猶恐るらくは、衆人以て高遠と爲して親せざることを。聖人の道は、必ず降りて自ら卑くす。此の如くならずんば、則ち人親せず。賢人の言は、則ち引きて自ら高くす。此の如くならずんば、則ち道尊からず。孔子・孟子を觀て、則ち見る可し。尹氏、曰く、聖人の言は、上下兼ね盡くす。其の近きに卽（つ）けば、衆人皆與（あづか）り知る可し。其の至を極むれば、則ち聖人と雖も亦以て加ふこと無し。是を之れ兩端と謂ふ。樊遲の仁知を問ふに答ふが如きは、兩端竭き盡くして餘蘊（ようん、余すところ）無し。若し夫れ上（かみ）に語りて下（しも）を遺（わす）る、理を語りて物を遺るなら、則ち豈に聖人の言ならんや。

■有知、無知の知の解釈が分かれる。伝統的には、出し惜しみをするような知とし、孔子には、そのような知はなく、誰であっても、出し惜しみをせず、トコトン教へたとした。朱熹は知識とし、孔子は謙って無知と言ったとした。どうやら、孔子には知を教へる、平成の言葉でいえば、知識を講義するといふ考え方をとらなかつた。知は、矢と曰からなり、矢は誓約のしるしで、約言を曰に容れて矢で誓ったことから来るが、説文に、「詞なり」とあり、言を司ると考へられ、知政（政を司る）、知事（事を司る）などと用ゐられた（字統）とする経緯がある。まるで空っぽの者も、そのことについてトコトン叩きまくる労を惜しまず、その者がそのことについて言を司ること、知に至る手助けをした。■何晏は、「知は、知意の知なり。言ふは、知者未だ必ず盡さざるを言ふ。今我は誠に盡す」とし、「孔安国曰く、鄙夫有り、來りて我に問ふ。其の意空空然たり。我則ち事の終始兩端を發し、以てこれを語り、知る所を竭し盡して、爲に愛（をし）むこと有らず」を引いた。■皇侃は、「知は、其の間に私意有る知を謂ふなり。聖人、道を體して度を爲す。意を用ふ知有ること無し。故に先ず弟子に問ふて云く。吾知る事有りや。又、知る事無しと云ふ。明らかに、己に知る事、知の意有らず。即ち是れ無意なり」、「知意は知を用ふ故に知を爲すを謂ふ。聖人は知を忘る。故に知る事無しは知意なり」、「若し知を用ゐば、則ち意を用ゐて偏有り。故に其れ言未だ必ず盡さず」、「我は不知を以て知る。故に言に誠にして盡さざること無し」、「此れ無知を擧げて誠に盡す事なり。鄙夫は鄙劣の夫なり。空空無識也。言ふは、鄙夫有り來りて我に問ふ、而して心に空虚抱くが如きなり」、「兩端は事の終始なり。復鄙夫と雖と言ふは、而して又虚空來りて我に問ひ、我も亦隱すこと無く、知を用ふを以てせずこれに處す。故に即ち其れ事の終始を發して。我が誠を竭し盡すなり。即ち是れ必無きなり。故に李充、云く、日月は照臨するに、愚智に光を易へず。聖人善に誘ふに、賢鄙に教異ならず。復鄙夫寡識と雖も、而るに其の疑を率て、誠に聖に諮る。必ずこれを示すに善惡の兩端を以てす。己は心を竭し以てこれに誨ふ」とし、「繆協、云く、夫れ名は跡に由りて生ず。故に知は事に從ひて顯る。無爲にして寂然たり。何ぞこれ有るを知る。唯だ其れ無きなり。故に能く應へざる所無し。鄙夫と雖も、誠に問はば必ず其の本末を盡さんとす」を引いた。■邢昺は、「此の章、孔子の人に教ふに必ず其の誠を盡すを言ふ」とし、「知は、意の知る所なり。孔子の言ふは、我に意の知る所有り。以て人に教ふに盡さざるか。これ無し。常人の知は未だ必ず盡さざるを言ふ。今、我は誠に盡す」、「此れ無知を擧げて誠に盡す事なり。空空は虚心なり。叩は發動なり。兩端は終始なり。言ふは、設（も）し鄙賤の夫有りて來りて我に問ひ、其の意空空然たれども、我は則ち事の終始兩端を發し以てこれに告げ語り、知る所を竭し盡し、愛（を）しむことなさず。言ふは、我は鄙夫に教ふに尚（な）ほ知る所を竭し盡す。況や禮義を知る弟子をや。明らかに愛惜無きや、其れ意の知る所に」とし、『知者知意之知也』と云ふは、知意の知、猶ほ意の知る所を言ふがごとし。『知者言未必盡』と云ふは、他人の短者を言ふ。これに言ひ以て人に教ふに、未だ必ず知る所を

竭し盡さざる。愛惜する所多しを謂ふ。『今我誠盡』と云ふは、孔子の言ふ今我は人に教ふに實に其の意の知る所を盡し、愛惜すること無きを謂ふ。故に無知と云ふ」と注した。

zǐ yuē fēng niǎo bú zhì hé bù chū tú wú yǐ yǐ hú
○子曰鳳鳥不至河不出圖吾已矣夫 子の曰はく、鳳鳥至らず、河圖を出さず。吾已んぬるかな。

夫音扶。○鳳靈鳥。舜時來儀、文王時鳴於岐山。河圖河中龍馬負圖、伏羲時出。皆聖王之瑞也。已止也。○張子曰、鳳至圖出、文明之祥、伏羲舜文之瑞。不至則夫子之文章知其已矣。夫 hú は音扶。○鳳は靈鳥。舜の時來儀し、文王の時岐山に鳴く。河圖は、河中の龍馬、圖を負ひて、伏羲の時出づ。皆聖王の瑞なり。已は止なり。○張子（張載、1020-1077、字は子厚、横渠先生、北宋の儒学者、「気の哲学」（唯物論）を創始）が曰く、鳳至り圖出るは、文明の祥。伏羲・舜・文の瑞、至らず、則ち夫子の文章其れ已んぬることを知る。

■孔子は天命を継承する自覚があったが、多能であったこと、天が孔子を聖人とする瑞を示さなかったことに病まれた。そして、いっそ謙虚になられたようである。■何晏は、「孔安国曰く、聖人、命を受るなば則ち鳳鳥至り、河圖を出す。今、天、此の瑞無し。『吾已矣夫』とは、見（あら）はることを得ず。河圖は、八卦是れなり」を引いた。■皇侃は、「夫れ時の人は皆、孔子に人主の事有るを願ふ。故に、孔子、釋已し、得ず以て之に塞がるとす。昔の聖人は應（まさ）に王者たる、必ず鳳鳥・河圖の瑞有るべしと言ふ。今、天此の瑞無し。故に、吾已矣夫と云ふ。已は止なり。吾已は止みて此の事無きを言ふ。故に繆協、云く、夫れ聖人、命に達す。復た俟たず、此れ乃ち知なり（？）。方（まさ）に知を遺（わす）れ事に任す。故に、理至りて乃ち言ふ。言ふ所以は、將に衆庶の望を釋（す）つ（？）」、「又、孫綽（東晋、文人、314-371）、云く、孔子、乃ち此の言を發す所以は、以て大聖の徳を體す。弟子は皆、絶異の質を稟（う）く。殊才・英偉・命世之才を壘（塁）落す。蓋し王徳は上に光り、將に下に相ひ備ふべし。當世の君は、咸（みな）忌難の心有り。故に此を稱すに「微己之不王（己を召して王とせず、か？）」を以てす。不達者の疑望を絶つなり」、「麟鳳五靈は王者の嘉瑞なり」、「聖人王則ち龍馬及び神龜有り。應に王の圖書を負ひて、河に従ひて出で、瑞とす。龍は圖を伏羲に授くが如く、龜は書を姒禹（禹は姒姓）に昇（あ）たふ」、「八卦は則ち易乾坤等八方の卦なり。龍はこれを負ひて出で伏羲に授く」とした。■邢昺は、「此の章は、孔子の傷時、無明君を言ふなり。聖人、命を受ければ則ち鳳鳥至り、河圖を出す。今、天此の瑞無し、則ち時に聖人無し。故に歎きて曰く、『吾已矣夫』、見はれること得ずを傷むなり」とし、『禮器』に云く、『中を天に上げて、鳳皇降る』。『援神契』に云く、『徳が鳥獸に至り則ち鳳皇來る』。天老、曰く、『鳳の象は、麟が前鹿が後、蛇の頸魚の尾、龍の文龜の背、燕の含雞の喙（くちばし）、五色備へ擧ぐ。東方の君子の國に出で、四海の外に翔び、昆侖を過ぎ、砥柱（しちゅう、黄河の最激流に立つ石）に飲み、弱水（じゃくすい、崑崙山に流れる河）に羽を濯（あら）ひ、丹穴（鳳の生まれた南方の山）に宿ること莫し。見はれば則ち天下は大きに安寧』。鄭玄、以て、河圖、洛書、龜龍銜（ふく）み負ひて出ずと為す。『中候』説く所の『龍馬甲を銜む、赤文にして綠色、甲は龜の背に似る。表廣（長さ）と幅は九尺、上に列宿門正の度有り、帝王、興亡の數を録紀す』の如き、是れなり。孔安國、以て河圖即ち八卦と為すは是れなり」とした。

zǐ jiàn zī cuī zhē miàn yī cháng zhě yǔ gǔ zhē jiàn zhī shǎo bì zuò guò zhī bì qū
○子見齊衰者冕衣裳者與瞽者見之雖少必作過之必趨 子齊衰の者と、冕衣裳の者と、瞽

者を見れば、之を見て少（わか）しと雖も必ず作（た）つ。之を過ぐれば必ず趨（は）しる。齊音咨。衰七雷反。少去聲。○齊衰喪服。冕冠也。衣上服。裳下服。冕而衣裳、貴者之盛服也。瞽無目者。作起也。趨疾行也。或曰少當作坐。○范氏曰、聖人之心、哀有喪、尊有爵、矜不成人。其作與趨、蓋有不期然而然者。尹氏曰、此聖人之誠心、内外一者也。齊 zī は音咨。衰 cuī は七 qī 雷 léi の反（音声が合はない）。少 shǎo は去聲。○齊衰は喪服。冕は冠なり。衣は上服。裳は下服。冕して衣裳するは、貴者の盛服なり。瞽は目無き者。作は起なり。趨は疾行なり。或ひと曰く、少は當に坐に作るべし。○范氏曰く、聖人の心、喪有るを哀しみ、爵有るを尊び、不成人を矜（あは）

れしむ。其の作と趨とは、蓋し然るを期せずして然る者有り。尹氏が曰く、此れ聖人の誠心、内外一なる者なり。
 ■孔子の謙虚さを著はすものであろう。作は起、坐しているものが立つ、趨は疾行、素早く走り去る、かような禮の伝統のない日本人には、その行動様式は不明。作は人と乍からなり、乍は説文に、「止なり」とある。立ち止まり道を譲ることではないか。趨は儀式における歩き方であり、かような場面では、さような人々に敬意を表して去られた。
 ■何晏は、「包氏曰く、冕は冠なり、大夫の服。瞽は盲なり」、「包氏曰く、作は起なり。趨は疾く行くなり。此れ夫子、喪有を哀み、位に在を尊び、不成人を恤（うれふ）るや」を引いた。
 ■皇侃は、「此れ孔子人喪有る者を哀むを記す。齊衰は五服（斬衰「ざんさい」・齊衰「しさい」・大功・小功・緦麻「しま」）の第二の者なり。言ふは、齊は則ち斬に従ふこと知る可し、而して大功に預らず」、「孔子、位に在る者を尊敬すを記すなり。冕衣裳は、周禮に大夫以上の服なり。大夫以上は尊、則ち士は列に在らず」、「孔子、不成人を愍むを記す。瞽は盲者なり。與は盲者卑きを言ふ。故に與字を加へ以て之を別く。言ふは、瞽者は則ち聾者に預らず。聾は盲に軽きなり」、「言ふは、孔子、此の三種人を見れば、復た年少と雖も、孔子、坐を改めて之を見るに、必ずこれを為すに起つ」、「趨は疾行なり。又明らかに、孔子若し此の三種人に行過ぎれば、必ずこれを為すに疾速す。自ら修め容れるを取らず。范寧云く、趨はこれに就くなり」とした。
 ■邢昺は、これらを踏襲した。

yányuānkùirántànyuēyǎngzhī mí gāozuānzhī mí jiānzhānzhī zài qián hū yān zài hòu
 ○顔淵喟然歎曰仰之彌高鑽之彌堅瞻之在前忽焉在後 顔淵喟然（いぜん）として歎じて曰く、之を仰げば彌（いよいよ）高し。之を鑽（き）れば彌堅し。之を瞻（み）るに前に在り、忽焉（こつえん）として後（しりへ）に在り。喟苦位反。鑽祖官反。○喟歎聲。仰彌高、不可及。鑽彌堅、不可入。在前在後、恍惚不可爲象。此顔淵深知夫子之道、無窮盡、無方體而歎之也。喟 kui は苦 kǔ 位 wèi の反（音が合はない）。鑽 zuān は祖 zǔ 官 guān の反。○喟は歎く聲。仰げば彌々高しは、及ぶ可からず。鑽けば彌々堅しは、入る可からず。前に在り後に在りは、恍惚として象を爲す可からず。此れ顔淵深く、夫子の道窮まり盡きること無く、方に體無きことを知りて之を歎ずるなり。

■では、孔子の現実とは？顔淵のことばを借りた。仰げば仰ぐほど高くなり、削り磨けば削り磨くほど堅くなる。懸命に付いてゆくと、いつのまにか後ろからじっとみておられる。
 ■何晏は、「喟は歎の聲」、「窮して盡す可らずを言ふ」、「言ふは恍惚として形象為す可らず」とした。
 ■皇侃は、「孔子は聖に至る。顔は上賢に生る。賢聖の道絶へる。故に顔は致歎すなり」、「此の所歎の事なり。夫れ物高しと雖も、若し仰ぎ瞻れば則し観る可し。物堅しと雖も、若し鑽錐（さんすい、きってねじあける）せば則ち入る可し。顔は、孔子の道に、愈（いよいよ）瞻れば愈高く、彌（いよいよ）鑽れば彌堅し。己が厝力の能（とぐ能力）得るに非ず。故に孫綽云く、夫れ有限の高、嵩岱（嵩山・泰山）と雖も陵す可し。有形の堅、金石と雖も鑽る可し。乃ち彌高く彌堅くして、鑽仰すること速（およ）ばざる所の若し。故に知ること絶域の高堅、未だ力を以て至る可らず」、「上下の絶域に向明仰鑽す、此れ明らかに、四方の無窮なり。四方にして瞻れば復遼遠と為すが若し。故に恍惚（きょうこつ、恍惚）として己が定む所に非ず。或前或後の所以なり。又一通に云く、愈瞻れば愈遠し。故に、これを瞻れば前に在りと云ふ。愈顧れば愈後に、故に、忽焉として後に在りと云ふ。故に孫綽云く、馳せて及ばず。待して至らず。行かず動かず。孰か能く其の妙所を測るかな。江熙云く。聖の道を慕ひて、其れ庶幾すること殆（ほぼ）す（もう少しで実現する）。是れ其の高を齊（ひと）しと欲すを以てす、而れどもこれを仰ぎて愈邈（とほ）し。思等（ひと）しくして其れ深し。而れども鑽鑿（さんさく、きってうがつ）せば愈堅し。尚、其の前に竝べば、而れども俛（ふ）し仰げば塵絶（じんぜつ）す（世俗をはるかに超へる）。此れ其れ喟然たる者の所以なり」とした。
 ■邢昺は、「此の章夫子の道を美（ほ）むなり」とし、「喟は歎聲なり。彌は益なり。顔淵、喟然として歎を發す。言ふは、夫子の道は高堅にして窮め盡す可からず。恍惚として形象為す可らず。故に仰ぎてこれを求むれば則ち益（ますます）高く、鑽研してこれを求むれば則ち益堅し。これを瞻ること前に在りて忽然として又復後に在るに似るが若し」とした。

fū zǐ xúnxúnránshàn yòu rén bó wǒ yǐ wényuē wǒ yǐ lǐ
 夫子循循然善誘人博我以文約我以禮 夫子循循然として善く人を誘(す)む。我を博むるに

文を以てし、我を約するに禮を以てす。循循有次序貌。誘引進也。博文約禮、教之序也。言夫子道雖高妙、而教人有序也。侯氏曰、博我以文、致知格物也。約我以禮、克己復禮也。程子曰、此顏子稱聖人最切當處。聖人教人、唯此二事而已。循循は次序の有る貌。誘は引進なり。博文約禮は教の序なり。言ふは、夫子の道高妙なりと雖も、人を教ふこと序有り。侯氏が曰く、我を博むるに文を以てすは、知を致し物を格(ただ)すなり。我を約するに禮を以てすれば、己に克ち禮に復するなり。程子の曰く、此れ顏子聖人を稱する最も切當の處。聖人、人を教ふる、唯此の二事のみ。

■先生は、筋道を立て順序よく、人ごとに導かれる。さまざまな事象や社会の仕組みをとりあげ、それを貫く礼を習得せしめんとされる。■何晏は、「循循は次序(次第・順序)の貌。誘は進なり。言ふは、夫子、正に此の道を以て人を勧め進るに序する所有り」とした。■皇侃は、「又、聖道に歎じ懸(か)ると雖も、而ども人をして企慕(仰慕)せしむ。循循は次序なり。誘は進なり。言ふは、孔子は聖道を以て人を進勧す。而して次序有り。故に善く人に誘むと曰く」、「此の説、善く誘の事なり。博は廣なり。文は文章なり。言ふは、孔子廣むに文章を以てし我に誘引す。故に、我を博むに文章を以てすと云ふ。又、禮を以て教へ我を約束す。故に、我を約すに禮を以てすと云ふ」とした。■邢昺は、「循循は次序の貌。誘は進なり。言ふは、夫子は此の道を以て人に教へ、循循然として次序有り。善く人に進勧すと謂ふ可し」とした。

yù bà bù néng jì jié wú cái rú yǒu suǒ lì zhuó ěr suī yù cóng zhī mò yóu yě yǐ
 欲罷不能既竭吾才如有所立卓爾雖欲從之末由也已 罷(や)めんと欲して能はず、既に吾

が才を竭くす。立てる所有りて卓爾たるが如し。之に従はんと欲すと雖も、由(よし)末(なき)のみ。卓立貌。末無也。此顏子自言其學之所至也。蓋悦之深、而力之盡、所見益親、而又無所用其力也。吳氏曰、所謂卓爾、亦在乎日用行事之間、非所謂窈冥昏默者。程子曰、到此地位、功夫尤難。直是峻絶。又大段著力不得。楊氏曰、自可欲之謂善、充而至於大、力行之積也。大而化之、則非力行所及矣。此顏子所以未達一聞也。○程子曰、此顏子所以爲深知孔子而善學之者也。胡氏曰、無上事而喟然歎。此顏子學既有得。故述其先難之故、後得之由、而歸功於聖人也。高堅前後、語道體也。仰鑽瞻忽、未領其要也。惟夫子循循善誘。先博我以文、使我知古今、達事變、然後約我以禮、使我尊所聞、行所知、如行者之赴家、食者之求飽。是以欲罷而不能、盡心盡力、不少休廢。然後見夫子所立之卓然、雖欲從之、末由也已。是蓋不怠所從、必求至乎卓立之地也。抑斯歎也、其在請事斯語之後、三月不違之時乎。卓は立つ貌。末は無なり。此れ顏子自ら其の學の至る所を言ふ。蓋し悦ぶこと深くして、これを力むること盡せり。見る所益々親しく、又其の力を用ふる所無し。吳氏が曰く、所謂卓爾は、亦日用行事の間に在り、所謂窈冥昏默(えうめいこんもく、莊子、在宥篇、窈窈冥冥「かすかでくらく微妙」…昏昏默默「見へずひそかで奥深い」)なる者に非ず。程子の曰く、此の地位に到りて、功夫(いろいろと方法を考えて良い手段を見出すこと)尤も難し。直に是れ峻絶。又大段(大いに至る)力を著(あらは)すを得ず。楊氏が曰く、欲す可き善を謂ふより、充ちて大に至るは、力行之積なり。大にして之を化するは、則ち力行の及ぶ所に非ず。此れ顏子が未だ達せざる一聞なる所以。○程子の曰く、此れ顏子の深く孔子を知りて善く之を學ぶと爲す所以の者なり。胡氏が曰く、事上ること無くして喟然として歎ず。此れ顏子、學既得ること有り、故に其れ難きを先ずる故に、得ることを後する由を述べて、功を聖人に歸すなり。高堅前後は道の體を語るなり。仰鑽瞻忽は、未だ其れ要して領せざる。惟夫子、循循として善く誘む。先ず我を博むるに文を以てして、我をして古今を知らし、事變に達せしめ、然る後に我に約するに禮を以てして、我をして聞く所を尊び、知る所を行はしむ。行く者の家に赴き、食する者の飽くことを求むるが如し。是を以て罷めんと欲すれども能はず。心を盡くし力を盡くして、少しも休廢せず。然る後に夫子立つ所の卓然たるを見て、之に従はんと欲すと雖も、由末(なき)のみ。是れ蓋し從ふ所を怠らず、必ず卓立の地に至ることを求むるなり。抑々斯の歎は、其れ請ふ斯の語を事(こと)せる後、三月違はざる時に在るか。

■届いたと思うと、また、上にあり、届かない。しかし、もうやめることはできない。末は説文に、「木の上を末と曰ふ」とある。末は先っぽであり、元来は両端、始末となって、末端となる。又、莫 mò に通用し、無に通用した。末由はどうすればよいか分からないといふことではないか。師のことはを思索し実践することには飛び抜けていたが、顔淵には、政治家、あるいは多彩な弟子をとりまとめ、一門を率える経験がない。その壁が立ちだかっただけではなからうか。■何晏は、「孔安国曰く、言ふは、夫子、既に文章を以て我を開博し、又、禮節を以て我を節約し、我をして罷んと欲して已むこと能はず我が才を竭くさしむ。其の立つ所有ることは、則ち又卓然として及ぶ可らず。言ふは、已夫子の善誘を蒙ると雖も、猶夫子の立つ所に及ぶこと能はず」とした。■皇侃は、「文に博め禮に束す。故に、我は罷止すを欲すと雖も、而ども止むこと能はず」、「既に盡すなり。才は才力なり。我は罷むこと能はず。故に、我の才力を盡し竭してこれを學ぶ。故に、孫綽云く、既に文章を以て我を博め視て聽く。又、禮を以て我を節約し以て中（中庸）す。俯し仰ぎ動き止る（立ち居振る舞い）に、景行（偉大と敬して慕ふ）せざること莫し。才力已（すで）に竭して、猶已（や）むこと能はざるがごとし。罷は猶罷息（ひそく）するがごとし（休息するをやめる）」、「此れ絶地、言ふこと得可らずの處を明かにすなり。卓高にして遠貌なり。言ふは、雖自ら才力を竭し以て博文約禮を學ぶ。而れども孔子は更に言述創立する所有り。則ち卓爾高絶なり」、「末は無なり。言ふは、其れ好（よ）き妙高已絶。欲すこと已むと雖もこれに従ふ。而して由無く及ぶ可し。故に孫綽云く、常事皆循ひてこれを行ふ。興立する所有りて卓然として視聽の表出すが若し（？）」。猶天の階して升る可らざるがごとし。これに従ひ將に何に由るや。此れ顔孔の絶處する所なり（？）」とした。■邢昺は、「末は無なり。言ふは、夫子既に我を開博すに文章を以てし、又我を節約すに禮節を以てす。我をして欲罷め止めしめんとして能はず。已に我が才を竭し盡して、其れ夫子は更に創立する所有り。則ち又卓然として絶異。已むこと欲しこれに従ふと雖も、由得て及ぶこと無し。言ふは、已に夫子の善誘に蒙（かふむ）ると雖も、猶夫子の立つ所に及ぶこと能はざるがごとし」とした。

zǐ jí bìng zǐ lù shǐ mén rén wéi chén
 ○子疾病子路使門人爲臣 子疾病す。子路門人をして臣爲（た）らしむ。夫子時已去位、無家臣。子路欲以家臣治其喪。其意實尊聖人、而未知所以尊也。夫子時に已に位去り、家臣無し。子路家臣を以て其の喪を治めしめんと欲す。其の意、實は、聖人を尊びて、未だ尊ぶ所以を知らず。

■史記、仲尼弟子列伝子によれば、「仲由、字は子路。卞の人なり。孔子より少きこと九歳。子路、性鄙（いや）しく、勇力を好み、志伉直（こうちよく）にして雄鷄を冠し、豕豚を佩び、孔子を陵暴する。・・・敝緼袍を衣て、狐貉を衣る者と立ちて恥じざるは、其れ由か。・・・千乗の國、その賦を治めしむべし」とあり、無頼の徒から弟子となり、粗衣粗食を恥じず、大國の將軍たる器量の武人たりえた人。内心では、孔子を君、自らを臣とし、また、孔子に直言できた人であった。孔子の大病に、孔子を魯公には及びにつかぬ君子と思ふ子路は、その敬意により、臣下の礼を執らざっておれなかったのだろう。■何晏は、「包氏曰く、疾の甚しきを病と曰ふ」、「鄭玄曰く、孔子嘗て大夫と爲る、故に、子路、弟子をして其の臣の禮を行はしめんと欲す」を引いた。■皇侃は、「孔子が疾甚し」、「子路、孔子聖人を以てす。宜しく人君と爲す。且つ嘗て大夫と爲り、大夫は亦家臣を有つ。今疾病にして、忽に終亡すを恐る。故に、弟子をして臣禮を行はしむ。故に江熙云く、子路、聖人君道を以て足り、宜しく臣を有（たも）ち、猶上下の神祇に禱るがごとし」とした。■邢昺は、「此の章、孔子、不欺を言ふ」とし、何晏を踏襲した。

bìngjiānyuē jiǔ yǐ zāiyóuzhī xíngzhà yě wú chén ér wéi yǒu chén wú shuí qī qī tiān hū
 病間曰久矣哉由之行詐也無臣而爲有臣吾誰欺欺天乎 病間に曰く、久しきかな、由が詐りを行ふことや。臣無きを臣有りと爲す。吾誰を欺かん、天を欺かんや。間如字。○病間少差也。病時不知。既差乃知其事。故言我之不當有家臣、人皆知之。不可欺也。而爲有臣、則是欺天而已。人而欺天、莫大之罪。引以自歸。其責子路深矣。間は字の如し。○病間は差（い）ゆる少（すこし）く、病時、知らず。既に差へて乃ち其

の事を知る。故に言ふ、我の當に家臣有るべからず、人皆之を知る。欺く可からず。而るを臣有りと爲るは、則ち是れ天を欺くのみ。人として天を欺くは、莫大の罪、引きて以て自歸すれば、其れ子路を責むること深し。

■孔子が子路を厳しく諫めたとするが如何？。孔子は子路の性癖から、やはりな、子路のやりかねないことだ。君臣でない、師と弟子、同志とあれほど云いきかせたに。私が天を欺くわけなどないだろう、と苦言を呈した。尚、病間とは重病と重病の間の小康状態（少差）のこと。■何晏は、「孔安国曰く、病少し差るを間と曰ふ。言ふは、子路の之是の心有る、唯だ今日のみ非ず」を引いた。■皇侃は、「孔子が病少しく差ゆ。少差を間と曰ふ。謂へらく、少差間を為すとは、若し病不差ならば、則ち病相ひ續き間斷無し（重病のまま）。若し少差ならば、則ち病勢が斷絶し間隙有り。孔子が病困時に當りて、子路が立臣為すを覺らず。少差に至りて、乃ち子路が詐を行ふを覺りて欺くなり。言ふは、子路に此の詐を行ふ心有るは、復一日に非ず、故に『久矣』と曰ふ」、「臣無くして有と為す。是れ詐を行ふ所以なり」、「我實に臣無し。今汝詐りてこれを立つ。此の詐を持ちて誰を欺かむと欲すか。天下、人皆我に臣無きを知る。則ち人欺く可らず。今日これを立つ。此れ政是れ遠く天を欺むと欲す。故に、天を欺かんやと云ふ。一夫が臣を立つは事大。卒して定む可きに非ず。汝今これを立つ。是れ其の心已に久しく有るを知るが故なり」とした。■邢昺は、「少差を間と曰ふ。其の疾甚しき時に當り、子路、門人以て臣と為す。夫子知らず。病少差に及びて、これを知り、乃ちこれを責む。言ふは、子路、久しく是れ詐欺の心有り、今日に非ず」、「言ふは、我既に大夫を去る。是れ無臣なり。女（なんじ）、門人をして臣と為す。是れ無臣にして有臣と為す。此れ詐行ふが如し。人蓋しこれを知る。是れ人欺く可らず。故に、吾誰をか欺かんと云ふ。既に人欺く可らず、乃ち遠く天を欺くを欲すか」と簡明にした。

qiě yǔ yǔ qí sǐ yú chénzhīshǒu yě wú níng sǐ yú èr sān zǐ zhīshǒu hū qiě yǔ zòng bù dé dà zàng yǔ sǐ yú dào lù hū 且予與其死於臣之手也無寧死於二三子之手乎且予縱不得大葬予死於道路乎 且

つ予（われ）其れ臣の手に死なんよりは、無寧（むし）ろ二三子の手に死なんか。且つ予縱（たと）ひ大葬を得ずとも、予道路に死なんか。無寧寧也。大葬謂君臣禮葬。死於道路、謂棄而不葬。又曉之以不必然之故。○范氏曰、曾子將死、起而易箒。曰吾得正而斃焉、斯已矣。子路欲尊夫子、而不知無臣之不可爲有臣。是以陷於行詐、罪至欺天。君子之於言動、雖微不可不謹。夫子深懲子路、所以警學者也。楊氏曰、非知至而意誠、則用智自私、不知行其所無事、往往自陷於行詐欺天、而莫之知也。其子路之謂乎。無寧は寧なり。大葬は、君臣の禮葬を謂ふ。道路に死んは、棄てて葬らずを謂ふ。又之を曉すに必ず然らざる故を以てす。○范氏が曰く、曾子將に死なんとす、起きて箒を易へて、曰く、吾正を得て斃れば、斯れ已まん。子路夫子を尊ばんと欲す。而ども臣無きの臣有りと爲す可からざることを知らず。是を以て詐りを行うに陥り、罪、天を欺くに至る。君子の言動に於ける、微なりと雖も謹まざればある可からず。夫子深く子路を懲らすは、學者を警むる所以なり。楊氏が曰く、知至りて意誠あるに非ざれば、則ち智を用いて自私す。其の事無き所に行ふことを知らず。往往にして自ら詐りを行ひ天を欺くに陥りて、而して之を知ることに莫し。其れ子路を之謂ふか。

■孔子は、子路の篤き「親身」の心情は分かっていた。臣ではなく、同志のおまえ達に葬ってほしい。君主の大葬じゃなくば、道路で死ぬってものかね？たとえ荒野で死のうが、おまえ達がどうして野に屍を放置しよう。ただ、子路は師の心を慮って、行き過ぎることがあり、孔子の心が誤って伝はる懸念があった。子路は衛の出公の要請に応じることが孔子の仕官の最後のチャンスとし、「名を正す」といふ孔子の心を待ちきれず、自らが先行して出公に仕へた。孔子はそれを恐れた。■何晏は、「馬融曰く、無寧は寧なり。二三子は門人なり。就使（たと）ひ我臣有りて其の手に死すより、我寧ろ弟子の手に死んか」、「孔安国曰く、君臣の禮葬」、「馬融曰く、就使ひ我君臣の禮を以て葬ることを得ざれども、二三子の在る有り。我寧ろ當に道路に棄ることを憂ふべしか」を引いた。■皇侃は、「又、理を以てこれを喩す。三つ在りて事同じを言ふ。親を以て察して言ふが若し。則ち臣は弟子に及ばず。予は我なり。二三子は諸（もろもろ）の弟子なり。無寧は寧なり。言ふは、設使（たと）ひ我は臣の手に死すとも、則ち我は寧ろ弟子の手に死なん。臣禮は就（ただ）に有方（きっちりすること）を養ふ（涵養す）。有方則ち隔る。弟

子は無方(きまりがない)。無方則ち親なり」、「又、三つ在りて同じこと明らかなり。大葬は臣禮にして君を葬る。君葬は禮大、故に、大葬と曰ふ。-- 若し縦(たと)ひ君臣の禮葬を得ずとも、二三子在る有り。我、豈に復た道路に棄擲されるか。亦必ず葬を得るを言ふ」とした。■邢昺は、何晏を踏襲し、「言ふは、必ず、道路に至りて死さず」とした。

zǐ gòngyuēyǒuměi yù yú sī yùn dú ér zāngzhūqiúshàn jià ér gū zhū zǐ yuē gū zhī zāi gū zhī zāi wǒ dài jià zhě yě
 ○子貢曰有美玉於斯韞匱而藏諸求善賈而沽諸子曰沽之哉沽之哉我待賈者也 子貢が曰く、斯に美玉有り。匱(ひつ)に韞(をさ)めて諸を藏(かく)さんや。善き賈(あたい)を求めて諸を沽(う)らんや。子曰はく、之を沽らんかな。之を沽らんかな。我は賈を待つ者なり。韞紆粉反。匱徒木反。賈音嫁。○韞藏也。匱匱也。沽賣也。子貢以孔子有道不仕、故設此二端以問也。孔子言固當賣之。但當待賈。而不當求之耳。○范氏曰、君子未嘗不欲仕也。又惡不由其道。士之待禮、猶玉之待賈也。若伊尹之耕於野、伯夷・太公之居於海濱、世無成湯・文王、則終焉而已。必不枉道以從人、銜玉而求售也。韞 yùn は紆 yū 粉 fěn の反(音と声が合はない)。匱 dú は徒 tú 木 mù の反(音と声が合はない)。賈 jià は音嫁。○韞は藏なり。匱は匱なり。沽は賣なり。子貢、孔子道有りて仕へざるを以て、故に此の二端を設けて以て問ふ。孔子言く、固より當に之を賣るべし。但に當に賈を待つべし。而して當に之を求むべからざるのみ。○范氏が曰く、君子は未だ嘗て仕へることを欲せざるにはあらず。又其の道に由らざることを惡む。士の禮を待ちて、猶玉の賈を待つがごとし。伊尹の野に耕して、伯夷・太公の海濱に居るが若きは、世に成湯・文王無くんば、則ち終らんのみ。必ず道を枉げて以て人に從ひ、玉を銜(てら)ひて售(う)らんことを求めず。

■放浪中の孔子を魯に呼び戻そうとする動きがあったが、孔子ではなく、すでに弟子の冉求が呼び戻されていた。子貢は冉求に孔子を呼び戻すことを図るよう求めた。その時が来たおりに、子貢は、かような方法で孔子の意志を確認したのかもしれない。我待賈者也是値をつける買手を待つ事、自ら売るとはもうしないが、善い買手ならば売るといふ答えであろう。賈 jià は値、gǔ で坐商のこと。■何晏は、「馬融曰く、韞は藏なり。匱は匱なり。諸を匱中に藏すを謂ふ。沽は賣なり。善き賈を得て、寧ろ之を賣んや」、「包氏曰く、之を沽哉とは、銜はず賣る辭。我は居て賈を待つ者」を引いた。■皇侃は、「子貢、孔子の聖徳を藏すや用ふや何如を觀んと欲す。故に事に託し以て衰否を諮るなり。美玉は孔子の聖道に譬ふ。言ふは、孔子聖道有りて可重。世間に美玉有りて此に在るが如し」、「答へて云はく、我は銜はず賣る者なり。故に重ねて、これを沽らんかなと云ふ。明らかに、銜はず賣ることの深きなり。*王弼が曰く、重ねてこれを沽らんかなと言ふ、賣ることを疑はず。故に孔子乃ち諸侯に聘されば以て其の道に急行す」、「又言ふは、我は銜はず賣ると雖も、然れども我は亦貴賈を待つのみ。求む者有りて則ちこれを與ふ」とした。■邢昺は、「此の章、孔子徳を藏し用ふを待つかを言ふ」、「子貢、孔子の聖徳の藏用何如を觀んと欲す。故に玉に託し以て諮問す。韞は藏なり。匱は匱なり。諸は之、沽は賣なり。言ふは、人美玉が此に有り、匱中に藏在しこれを藏す。若し善貴の賈で得るを求まば、寧ろこれを賣るを肯(がえん)ずや? 君子、玉に徳を比す。子貢の意、言ふは、夫子、美德有りてこれを懷藏す。若し人虚心にして禮を盡しこれを求めば、夫子これを與ふことを肯ずか」、「孔子、答へて言はく、我はこれを賣らんかな。銜はず賣る辭。銜はず賣ると雖も、我は居て賈を待つ。言ふは、人虚心有りて禮を盡し以て我が道を求めば、我は即ちこれを與ふこと吝(やぶさか)ならず」とした。

zǐ yù jū jiǔ yí
 ○子欲居九夷 子、九夷に居らんと欲す。東方之夷有九種。欲居之者、亦乘桴浮海之意。東方の夷、九種有り。之に居らんと欲するは、亦桴に乗り海に浮ぶ意なり。

■東方の伝承には、「少康(夏后少康)已後(以後)より世に王化に服し遂に王門に賓(ひん)し、その樂舞を獻ず「天性柔順、道をもって御(ぎょ)し易し。君子・不死の國有るに至る」とあり、孔子はそこに至り、民を教化し

てみたいと思っていたようである。■何晏は、「馬融曰く、九夷は、東方の夷、九種有り」を引いた。■皇侃は、「孔子の聖道、中國に行はれず。故に、東、九夷に往居すを欲すに託(かこつけ)る。亦、桴に乗り海に浮ぶを欲すが如し。*四方、東に九夷有り。一に玄菟。二に樂浪。三に高麗。四に滿飾。五に鳧更。六に索家。七に東屠。八に倭人。九に天鄙。南に八蠻有り。一に天竺。二に咳首。三に僬僥。四に跂踵。五に穿胸。六に僂耳。七に狗軹。八に旁脊。西に六戎有り。一に僥夷。二に依貊。三に織皮。四に耆羌。五に鼻息。六に天剛。北に五狄有り。一月支。二に濊貊。三に匈奴。四に單于。五に白屋なり也」とした。■邢昺は、「此の章、孔子、中國の明君無きに疾むを論ず」、「東方の夷九種有り。孔子時に明君無きを以て、故に東夷に居と欲す」とした。

huòyuēlòu rú zhī hé zǐ yuējūn zǐ jū zhī hé lòu zhīyǒu

或曰陋如之何子曰君子居之何陋之有 或は曰く、陋(いや)しきこと、之を如何。子の曰はく、君子之に居らば、何の陋しきことか之有らん。君子所居則化。何陋之有。君子居る所は則ち化す。何の陋しきことか之れ有らん。

■徳化されない状態が陋、徳化されれば陋に非ず。有教無類の姿勢がある。皇侃の九種に対して、邢昺は、後漢書、東夷傳を引いて、正した。魏志倭人伝の倭人は日本列島に住む人々であるが、それ以前の倭人は日本列島の存在を意識して居らず、漠然と朝鮮の南あたりに住む人々をさすものであった。■何晏は、「馬融曰く、君子居る所、則ち化す」を引いた。■皇侃は、「或人、孔子の意に達ふ。之を實居と謂ふ。故に陋しきこと之を如何と云ふ。夷狄は鄙陋にして居る可らずを言ふ」、「孔子答へて云はく、君子居る所即ち化す。豈に鄙陋を以て疑ふを爲すか。復た己が意を遠(ふか)く申さず。孫綽(314~371, 東晋の文人)云く、九夷を陋者と爲す所以は禮義無きを以てす。君子居る所の者は化す。則ち陋に泰有り。*聖人在る所は則ち化す。九夷、中に變ずは夏なり」とした。■邢昺は、「或人、孔子に謂りて言ふ、東夷は僻陋にして禮無し。如何にして居る可し」、「孔子、或人に答へて言はく、君子居る所則ち化し、禮義有らしむ。故に何んぞ陋しき之れ有らんと云はく」とし、『東夷傳』を案ずるに云く、夷に九種有り、曰く、吠夷(けんい)・于夷(うい)・方夷(ほうい)・黄夷(こうい)・白夷(はくい)・赤夷(せきい)・玄夷(げんい)・風夷(ふうい)・陽夷(ようい)、又、一に玄菟(げんと)と曰く、二に樂浪(らくろう)と曰く、三に高麗(こうらい)と曰く、四に滿飾(まんしょく)と曰く、五に鳧更(ふゆ)と曰く、六に索家(さくか)と曰く、七に東屠(とうと)と曰く、八に倭人(わじん)と曰く、九に天鄙(てんぴ)と曰く」と注した。

zǐ yuēwú zì wèifǎn lǚ ránhòuyuèzhèng yǎ sòng gè dé qí suǒ

○子曰吾自衛反魯然後樂正雅頌各得其所 子の曰はく、吾衛より魯に反りて然して後に樂正しく、雅頌各(おのおの)其の所を得たり。魯哀公十一年冬、孔子自衛反魯。是時周禮在魯。然詩樂亦頗殘缺失次。孔子周流四方、參互考訂、以知其說。晚知道終不行。故歸而正之。魯の哀公十一年の冬、孔子衛より魯に反る。是の時周禮魯に在り。然れども詩樂亦頗る殘缺して次を失ふ。孔子四方に周流し、參互考訂して、以て其の說を知る。晩に道終(つひ)に行はれざることを知る。故に歸りて之を正す。

■哀公十一年に冉求是斉との戦で功績を挙げ、それを「孔子の教」に帰し、季康子に孔子を呼び戻すことを進言し、その了解を得た。一方、孔子は衛で、孔文子に軍事の事は知らぬと公言しており、冉求是至急、弊を持参して孔子を呼び戻した。孔子は、帰国して、「雅頌、各其の所を得」とちぐはぐなことを述べ、冉求や子貢は内心ひやひやする思いであったろう。■何晏は、「鄭玄曰く、魯に反るは、哀公十一年の冬。是の時、道衰へ樂廢れ、孔子來り還りて、乃ちこれを正す。故に、雅頌、各其の所を得と曰ふ」を引いた。■皇侃は、「孔子、魯を去りて後而して魯の禮樂崩壞す。孔子、以て魯の哀公の十一年に、衛より魯に在る。而して詩書を刪し、禮樂を定む。故に、樂音正を得。樂音正を得るは、雅頌の詩各其の本所を得る所以。*雅頌はれ詩義の美者。美者既に正しくして、則ち餘者正しきこと亦知る可し」とした。■邢昺は、「此の章、孔子、樂を正廢す事を言ふを記す。孔子、以て定十四年に魯を去り、諸國に應聘す。魯の哀公の十一年、衛より魯に反る。是の時に、道衰へ樂廢る。孔子來り還りて、乃ちこれ

を正す。故に、雅頌、各其の所を得」とし、『左傳』を案ずに、哀十一年冬に、『衛の孔文子の將に大叔を攻んとし、仲尼に訪ぬ。仲尼、“胡簋（こき；礼器の名）の事は則ち嘗てこれを學べり。甲兵の事は未だこれ聞かず”と曰ひ、退き、駕に

命じて行く。曰く、“鳥は則ち木を擇ぶ、木は豈に能く鳥を擇ぶや”。文子、遽（には）かにこれ（孔子）を止めて曰く、“圉（文子の名）豈に敢へて其の私を度（はか）り、衛國の難を訪ぬなり”。將に止む。魯人、幣を以てこれを召し、乃ち歸る』。杜注に云く、『是に、衛より魯に反る。樂正しく、雅頌、各其の所を得』、是れなり」とした。

zǐ yuēchū zé shì gōngqīng rù zé shì fù xiōngsāngshì bù gǎn bù miǎn bù wéi jiǔ kùn hé yǒu yú wǒ zāi
 ○子曰出則事公 卿入則事父兄 喪事不敢不勉 不爲酒困何有於我哉 子の曰はく、出でては則ち公卿に事（つかふまつ）り、入りては則ち父兄を事る。喪の事は敢へて勉めずんばならず。酒の困（みだれ）を為さず。何れか我に有るや。説見第七篇。然此則其事愈卑、而意愈切矣。説は第七篇に見ゆ。然れども此は則ち其の事愈々に卑しくして、意愈々切なり。

■事は説文に、「職なり。史に従ひ、これ省聲。豈、古文の事」とある。史は内祭（祖祭）を意味し、事は外祭（外に赴き山川を祭祀する王事）を意味し、又、その祭りに事「つかひ」することも意味した（字統）。豈は侖で使、事（つかひ）を事（まつ）から分離したものが使。士として「つかえる」字が仕。事は、元来、王事、つまり政事行為を意味したが、後に、一般的に喪事など単に「こと」を意味するようになった。事公卿、事父兄とは祭事における心構えがあり、また、それが政事の原点といふ響きがあった。■不敢不～は、どんなことがあっても～する。喪事は地位や身分を問はず、心を込めて哀を行ふべしとなる。■困は口に木を付し出入り不可の状態。酒困は酩酊して正気が出入りできないさま。■何有～哉は、伝統的に、私には何の（難しい）ことが有ろうか、無いと積されてきた。しかし、孔子は幼くして父を亡くし、母の里に帰り、異母の兄とは離れ、母も若くして亡くし、孝弟を尽くすことはできなかつた。魯公の復権を図り三桓氏の大夫と対立し魯を去っている。それでも弟子に、このことが大事だと論しているのではないか。何有～哉は自分には十分できてはいないがとの述懐ではないか。■何晏は、「馬融曰く、困は亂なり」を引いた。■皇侃は、「公は君なり。卿は長なり。人の子の禮。父に事るに孝以て君に事るに移して則ち忠。兄に事るに悌以て長に事るに移して則ち従なり。故に、朝廷に出仕し必ず公卿に事るなり」、「孝以て父を事る。悌以て兄を事る。還りて閨門（家庭）に入る。宜しく其の禮を盡すべし。先に朝廷を言ひ、後に閨門を云ふは、己を勗（つと；まめまめしく働く）めて仕ふ者なり。猶仕へて優るは則ち學ぶがごとし」、「唯に酒無量と雖も亂るに及ばず。時に多く沈酗す（酒に飲まれる）。故にこれを戒む。衛瓘（えいかん、220年 - 291年）、西晋の軍人・政治家。字は伯玉）云く、三事は酒興を爲す。侃（皇侃）案ずに、衛意の如し。言ふは、朝廷、閨門及び有喪は、並びて酒困す所を爲さず。故に、三事、酒興を爲すと云ふ」、「言ふは、我何れか能く此の三事を行ふ。故に、何れか我に有りやと云ふ。又、一に云く、人若し能く此の如くば、則ち何ぞ復た我を須つ。故に、何有於我哉と云ふ。人に縁（よ）りて能はず、故に我世に應ずこと有り」とした。■邢昺は、「此の章、孔子、忠順、孝悌、哀喪、慎酒の事を言ふを記す。困は亂なり。言ふは、朝廷に出仕せば、則ち其の忠順を盡し以て公卿に事る。私門に入居せば、則ち其の孝悌を盡し以て父兄に事る。若し喪事有れば、則ち敢へて力を勉めずんばならず以て禮に従（よ）る。未だ嘗て酒亂其の性を為さず。他人に是の行無し。我においては、我獨りこれ有り。故に曰く、何有於我哉」とした。

zǐ zài chuān shàng yuē zhě rú sī fū bù shě zhòu yè
 ○子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜 子、川の上（ほとり）に在（ま）して曰はく、逝く者は斯の如きか。晝夜を舍（や）めず。夫音扶。舍上聲。○天地之化、往者過、來者續、無一息之停。乃道體之本然也。然其可指而易見者、莫如川流。故於此發、以示人。欲學者時時省察、而無毫髮之間斷也。○程子曰、此道體也。天

運而不已。日往則月來、寒往則暑來。水流而不息、物生而不窮。皆與道爲體。運乎晝夜、未嘗已也。是以君子法之、自強不息。及其至也、純亦不已焉。又曰、自漢以來、儒者皆不識此義。此見聖人之心、純亦不已也。純亦不已、乃天德也。有天德、便可語王道。其要只在謹獨。愚按、自此至終篇、皆勉人進學不已之辭。夫 **fú** は音扶。舍 **shě** は上聲。○天地の化、往く者は過ぎ、來る者は續く。一息の停ること無し。乃ち道體の本然なり。然れども其れ指して見易かる可き者は、川流に如くは莫し。故に、此に於て發して、以て人に示す。學者時時に省察して、毫髮の間斷無きを欲す。○程子の曰く、此れ道の體なり。天運りて已まず。日往けば則ち月來る。寒往けば則ち暑來る。水は流れて息まず、物生じて窮まらず。皆道と體を爲して、晝夜に運りて、未だ嘗て已まず。是を以て君子之に法りて、自ら強めて息まず。其の至に及びては、純にして亦已まず。又曰く、漢より以來、儒者皆此の義を識らず。此れ聖人の心、純にして亦已まざるを見る。純にして亦已まざるは、乃ち天の徳なり。天徳有りて、便ち王道を語る可し。其の要は只獨を謹むに在り。愚按ずるに、此より終篇に至るまで、皆人に學を進めて已まざることを勉むる辭なり。

■孔子が歎(たん) ずと釈すのが通説。川の流れを止めることも戻す事も不可、道を爲す君を求めて得られぬ時の流れもかくのごとし。朱熹は、それは違ふ、それでも、天徳、王道を求めてやまぬ、学ぶことをやめぬ孔子である、とする。舍 **shě** は上聲で、すてる、おく、やどす、止息する、命を發すこと。朱熹は不舍を程子を引き、不息、不已とした。ただ、2500年後の筆者も、その後の人も、川上にたたずむ孔子の時を共有する、時は流れ去るもののみならず。■何晏は、「包氏曰く、逝は往なり。言ふは、凡そ往く者は川の流の如し」を引いた。■皇侃は、「逝は往去の辭なり。孔子、川水の上に在(ま)す。川流の迅速を見る、未だ嘗て停止せず。故に人年の往去、亦復かくの如きを歎ず。向我は今我に非ず。故に逝く者は斯の如きかと云ふ者なり。斯れ此れなり。夫は語助なり。日月居らず有り流水の如し。故に晝夜を舍めずと云ふ。江熙云く、人、南山(詩經、天保、南山の寿、騫「か」けず崩「くず」れずの喩)に非ずを言ふ。徳を立て功を立て、俛(ふ俯)仰して時過ぐ。流に臨み懷を興し、能く慨然(がいぜん、嘆き憂ふ)せず。聖人、百姓の心を以て心と爲す。孫綽云く、川流、舍まず。年逝きて停らず。時已に晏(くら)し。而して道猶興らざるがごとし。憂ひ歎ず所以なり」とした。■邢昺は、「此の章、孔子時事既に往くを感歎すを記す。追ひて複す可らず。逝は往なり。夫子、川水の上に在すに因りて、川水の流迅速にして且つ追ひて複す可らずを見る。故にこれを感じて歎を興す。言ふは、凡そ時事往くは、此の川の流の如きか。以て晝夜して舍止すること有ることなし。

zǐ yuē wú wèi jiàn hào dé rú hào sè zhě yě
○子曰吾未見好徳如好色者也 子の曰はく、吾未だ徳を好むこと色を好むが如くする者を見ず。

好去聲。○謝氏曰、好好色、惡惡臭、誠也。好徳如好色、斯誠好徳矣。然民鮮能之。○史記、孔子居衛、靈公與夫人同車、使孔子爲次乘、招搖市過之。孔子醜之。故有是言。好 **hào** は去聲。○謝氏が曰く、好色を好み、惡臭を惡むは誠なり。徳を好むこと色を好むが如くするは、斯れ誠に徳を好む。然れども民之を能くすること鮮し。○史記に、孔子衛に居ます、靈公、夫人と車を同じふす。孔子をして次乗爲しめ、市に招搖して之を過ぐ。孔子之を醜(は)ず。故に是の言有り。

■徳に薄く、色に厚きを疾む、叱責したといふが傳統的解釈。朱熹は、孔子が衛で靈公の夫人の後ろに座らされてパレードに同乗せしめられたことを醜じて、この言を發したとした。さような叱責、慙愧であろうか。人は色を好む、これは人の性、持って生まれたもの。徳を好むといふも人の性にある。色を好むように好めばいい、せっかくの手本が自分の中にあるといふに、ただ、そうするものがない。■何晏は、「時の人徳に薄ふして色に厚きを疾む。故に此の言を發す」とした。■皇侃は、何晏を踏襲し、「時の人多く色を好みて徳を好む無し。孔子、これを患ふ。故に、未だ見ずと云ふ。以てこれを厲す(厳しく叱る)。*本註、其心の責むを云ふ。■邢昺も、何晏を踏襲し、「此の章、孔子、時の人徳に薄ふして色に厚きを疾む」とした。

zǐ yuē pì rú wéishānwèichéng yī kuǐ zhǐ wú zhǐ yě pì rú píng dì suī fù yī kuǐ jìn wú wǎng yě
 ○子曰譬如爲山未成一簣止吾止也譬如平地雖覆一簣進吾往也 子の曰はく、譬へば山

を爲るが如し。未だ一簣(き)を成さずして、止むは吾が止むなり。譬へば平地の如し。一簣を覆(こぼ)すと雖ども、進むは吾が往くなり。簣求位反。覆芳服反。○簣土籠也。書曰爲山九仞、功虧一簣。夫子之言、蓋出於此。言山成而但少一簣。其止者吾自止耳。平地而方覆一簣。其進者吾自往耳。蓋學者自強不息、則積少成多。中道而止、則前功盡棄。其止其往、皆在我而不在人也。簣 kuǐ は求 qiú 位 wèi の反(音が合はない)。覆 fù は芳 fāng 服 fú の反。○簣は土籠なり。書に曰く、「山を爲ること九仞、功一簣に虧く(書経、旅癸)」と。夫子の言、蓋し此に出ず。言ふは、山成りて但に一簣少なく、其れ止むは吾自ら止むのみ。地を平げて、方に一簣を覆す。其れ進むは吾自ら往くのみ。蓋し學者自ら強めて息まずんば、則ち少を積みて多を成す。中道にして止むは、則ち前の功盡く棄つ。其の止み其の往くこと、皆我に在りて人に在らず。

■書経、周書、旅癸(りょごう)に、召公が武王を戒めて述べた言の一節、「嗚呼(ああ)夙夜(しゅくや、夜明けから晩まで)或は勤(つと)めざること罔(なか)れ。細行を矜(つつし)まずんば、終(つひ)に大徳を累(わずらは)す。爲山九仞、功虧一簣」。先生は同じ一步も、最後の一步を怠れば止、志して踏み出す一步は往とされた。書を引かれたが、これから世にでる弟子が相手となれば、「止は止、進は往」と往に力点があろう。止まるな往け。■何晏は、「包氏曰く、簣は土籠なり。此は人を勧めて道徳に進ましむ。山を爲るは、其の功已だ多しと雖も、未だ一籠を成さずして中道にして止むは、我、其の前功の多しを以てこれを善しとせず。其の誌遂げざるを見る、故に與(あずか)らず」、「馬融曰く、平地は將に進みて功を加ふことをす、始て一簣を覆すと雖も、我、其の見る功の少きを以てこれを薄きとせず。其の進まんを欲するに據りてこれに與る」を引いた。■皇侃は、「此は、人善を爲し成らんとして止むを戒むものなり。簣は土籠なり。言ふは、人善を作し足らむとして止む。則ち善事成らず。山を爲り足らんとし唯に一籠の土少くして止むが如し、則ち山成らず。此れ是は功を建つこと篤からず。與、作さずに異なること無し。則ち吾は亦其の前功多しを以て善と為さず。善を爲して成らざるが如し。吾は亦其の前功多しを美(ほ)めず。故に吾止むと云ふ」、「此は人始めて善を爲して住かざる者に獎むなり。平地に山を作るに譬ふ。山乃ち多土を須(よう)す。而れども一籠を覆つに始む。一籠少しと雖も、是を交へ其れ進むを欲す心有れば嘉す可し。人始めて善を爲すが如きは、善乃ち未だ多からず。交へ進むことを求む志、重ずべし。吾は其の功少しを以てこれを善からずとせず。これを善しとすは、成らむとして止むに勝るもの有り。故に、吾は往くと云ふ」とした。■邢昺は、「此の章、孔子、人を勧めて道徳に進ましむなり」、「簣は土籠なり。言ふふあ、人の學ぶ道は、成らむとして止めば、前の功多しと雖も、吾は與らず。譬へば山を爲るが如きもの。其の功已に多しと雖も、未だ一籠成らず、而して中道にして止むは、我、其の前功多きを以てこれを善しとせず。其の誌遂げられず、故に吾止みて與らず」、「人徳を進みて業を脩むを言ふ。功未だ多からずと雖も、而れども強めて學び息まず。則ち吾これを與す。譬へて平地の如きは、將に進みて功を加へ、一簣を覆つに始むと雖も、我は其の功少しを以てこれを薄しとせず。其の進むを欲すに據る。故に吾は則ち往きてこれに與る」とした。

zǐ yuē yù zhī ér bù duòzhě qí huí yě yú
 ○子曰語之而不惰者其回也與 子の曰はく、之に語げて惰(をこた)らざる者は、其れ回なるか。

語去聲。與平聲。○惰懈怠也。范氏曰顔子聞夫子之言、而心解力行、造次顛沛、未嘗違之。如萬物得時雨之潤、發榮滋長。何有於惰。此羣弟子所不及也。語 yù は去聲。與 yú は平聲。○惰は懈怠なり。范氏が曰く、顔子、夫子の言を聞きて、心に解り力めて行ふ。造次顛沛、未だ嘗て之に違はず。萬物の時雨の潤いを得て、發榮滋長するが如し。何ぞ惰ること有らん。此れ羣弟子の及ばざる所なり。

■前章を受けて、その手本として、顔回に言及する。次章を考慮すれば、顔回を亡くして、後の述懐であろう。惰

の正字は惰、惰は肉の崩れたさまが原義、敬（つつし）みのないこと、惰は謹しみのない崩れた姿勢をいう（字統）とある。先生の話の聴いて、何のことか分からず、ぼ～とする弟子が多かったようである。■何晏は、「顔淵、解す。故に之に語げて惰らず。餘人、解せず。故に、語るに惰る時有り」とした。■皇侃は、「惰は疲懈なり。餘人、盡く解すこと能はず。故に、孔子語るを聞きて疲懈すること有り。唯だ顔回、これを體す。故に、語るを聞きて即ち解す。語之而不惰其回也與と云ふ所以」とした。■邢昺は、「此の章、顔回を美（ほ）むなり」とし、何晏、皇侃を踏襲した。

zǐ wèiyányuānyuē xī hū wújiàn qí jìn yě wúwèijiàn qí zhǐ yě
○子謂顔淵曰惜乎吾見其進也吾未見其止也 子、顔淵を謂ひて曰はく、惜しいかな。吾其の進むを見る。未だ其の止むを見ず。進止二字説見上章。顔子既死、而孔子惜之。言其方進而未已也。進止の二字、説、上章に見えたり。顔子既に死して、孔子之を惜しむ。言ふは、其れ方に進みて未だ已まざる。

■志して足を踏み出し、止むことがない。顔淵は、陳と蔡の間の荒野で、諸侯に容れられず窮地に陥った孔子に、容れない諸侯に合はすことなく、その道を貫く師を支持した。■何晏は、「包氏曰く、孔子顔淵を謂ひて進益未だ止まざるを謂ふを、痛惜（つうせき）の甚（はなはだ）しき」を引いた。■皇侃は、「顔淵死後。孔子此の歎有り。云ふは、進むを見て未だ止むを見ず。其の神識（心の働き）猶長からずを惜しむ。然るに顔淵分已に満ち屢（しばしば）空に至る。而して此れ未だ其の止むを見ざるを云ふ。勸引の言なり。故に殷仲堪（いんちゅうたん、?- 399年、東晋の武将、老子を愛読し、清談をよくし、天師道を信じ、医術にすぐれた）云く、夫れ賢の假す所一語にして盡す。豈に彌（いよいよ）勳（勲）實を進むこと有りや。蓋し其れ軌物の行日に跡を見る。夫子従ひて咨嗟（嘆息）すに盛徳の業を以てす」。■邢昺は、「此の章、顔回の早死を以て、孔子、後に歎じこれを惜む。孔子、顔淵進益し未だ止らずを謂ひて、痛惜の甚しき」とした。

zǐ yuēmiáo ér bú xiùzhěyǒu yǐ fú xiù ér bù shízhěyǒu yǐ fú
○子曰苗而不秀者有矣夫秀而不實者有矣夫 子の曰はく、苗にして秀でざる者有るかな。秀でて實らざる者有るかな。夫音扶。○穀之始生曰苗、吐華曰秀、成穀曰實。蓋學而不至於成、有如此者。是以君子貴自勉也。夫 fú は音扶。○穀の始めて生ずを苗と曰ふ。華を吐くを秀と曰ふ。穀を成すを實と曰ふ。蓋し學びて成に至らず、此の如き者有り。是を以て君子自ら勉むことを貴ぶ。

■伝統的に、苗にして秀でた顔淵が実らず亡くなったことを嘆じたものと見なされてきた。朱熹は、そうではなく、学ぶ者を戒めるものとした。そうだろうか？秀でない苗は幾多ある。その数少ない秀でた苗でも実らない。天命を得たと自覚した孔子ですら実らない。しかし、死後に実ることもある。■何晏は、「孔安国曰く、言ふは、萬物生じて育成せざる者有り。人も亦然るに喩ふ」を引いた。■皇侃は、「又、譬を爲して顔淵を歎ず（を為す）。萬物草木に苗稼（びょうか、苗と植え付けた穀類）蔚茂（いも、盛んに育成する）有りて、秀穂を経ず。風霜に遭ひて死すもの。

又、亦秀穂を能くすこと有りと雖も、而して沴（水不利）焯（乾）氣に値（遇到）して、粒實有ること能はぬもの。

故に並びて「有矣夫」と云ふ。物既に然有り。故に人亦此の如し。顔淵早年に芳蘭（ほうらん）を摧（くだ）かる所以」とした。■邢昺も、「此の章、亦、顔回の早卒を以て、孔子これを痛惜す。これを為すに譬を作す。言ふは、萬物生れて不育成せぬもの有り、人に喩へて亦然り」とした。

zǐ yuēhòushēng kě wèiyānzhi lái zhězhī bù rú jīn yě sì shíwǔshí ér wúwényān sī yì bú zú wèiyě yǐ
○子曰後生可畏焉知來者之不如今也四十五而無聞焉斯亦不足畏也已 子の曰はく、後生畏る可し。焉んぞ來者の今（けふ）に如（しか）ざるを知らん。四十五にして聞うる事無きは、斯

れ亦畏るに足らざるのみ。知之焉、於虔反。○孔子言、後生年富力彊。足以積學而有待。其勢可畏。安知其將來不如我之今日乎。然或不能自勉、至於老而無聞、則不足畏矣。言此以警人、使及時勉學也。曾子曰、五十而不以善聞、則不聞矣。蓋述此意。○尹氏曰、少而不勉、老而無聞、則亦已矣。自少而進者、安知其不至於極乎。是可畏也。焉知の焉 yān は、於 yú 虔 qián の反。○孔子言ふ、後生は年富力彊し。以て學を積みて待つこと有るに足れり。其の勢畏る可し。安んぞ其の將來、我が今日の如くならざるを知らんや。然れども或は自ら勉むること能はず、老に至りて聞くこと無くば、則ち畏るに足らず。此を言ひて以て人を警め、時に及びて學を勉めしむ。曾子曰く、五十にして善を以て聞へずんば、則ち聞へずと。蓋し此の意を述ぶ。○尹氏が曰く、少（わか）くして勉めず、老いて聞へること無くば、則ち亦已む。少きよりして進む者は、安んぞ其れ極に至らざることを知らんや。是れ畏る可きなり。

■戦争や大災害による荒廃が続かねば、学は積まれ、後生の者は前生の積に立って、より積むことが可能となる。しかし、後生の者、四十、五十といふに、その名が聞こへてこない。二千五百年の後生の筆者も不足畏の類。畏は説文に、「悪なり。由に従ひ虎省、鬼頭に於て虎爪、畏る可し」とある。本来は人為を超えたぞっとする恐れ。■何晏は、「後生は年少を謂ふ」とした。■皇侃は、「後生は年少を謂ふ。己在りて後生なる者なり。畏る可しは、才學有りて心服す可き者を謂ふ」とした。■邢昺は、「此の章、學を勸むなり」、「後生は年少を謂ふ。言ふは、年少の人、學を積むを以て成徳に足る、誠に畏る可し。安んぞ將來の者の道德、我が今日に如かずを知る」、「言ふは、年少時に學を積みて成徳能はず、四十に至り、五十にして名聞くこと無から令めば、強めて學ぶを欲すと雖も、終に成徳無し。故に畏るに足らず」とした。

zǐ yuē fǎ yǔ zhī yán néng wú cóng hū gǎi zhī wéi guì yǔ zhī yán néng wú yuè hū yì zhī wéi guì yuè ér bú yì cóng ér bù gǎi
○子曰法語之言能無從乎改之爲貴異與之言能無說乎繹之爲貴說而不繹從而不改

wú mò rú zhī hé yě yǐ yǐ
吾末如之何也已矣 子の曰はく、法語の言は、能く從ふこと無らんや。之を改むるを貴しと爲す。異與（そんよ）の言は、能く説（よろこ）ぶこと無けんや。之を繹（たず）ぬるを貴しと爲す。説んで繹ねず、從ひて改めずんば、吾之を如何ともすること末（な）きのみ。法語者、正言之也。異言者、婉而導之也。繹尋其緒也。法言人所敬憚。故必從。然不改、則面從而已。異言無所乖忤。故必説。然不繹、則又不足以知其微意之所在也。○楊氏曰、法言、若孟子論行王政之類、是也。異言、若其論好貨好色之類、是也。語之而不達、拒之而不受、猶之可也、其或喻焉、則尚庶幾其能改繹矣。從且説矣、而不改繹焉、則是終不改繹也已。雖聖人其如之何哉。法語は、正しく之を言ふ。異言は、婉（えん）して之を導く。繹は、其の緒を尋ぬる。法言は人の敬（つつ）しみ憚（は）ばか）る所。故に必ず從ふ。然れども改めずんば、則ち面從のみ。異言は乖（そむ）き忤（さか）ふ所無し。故に必ず説ぶ。然れども繹ねずんば、則ち又以て其の微意の在る所を知るに足らず。○楊氏が曰く、法言は、孟子、王政を行はんことを論ずるが類の若き、是れなり。異言は、其の貨を好み色を好むを論ずるが類の若き、是れなり。之に語げて達せず、之を拒みて受けざるは、猶之れ可なり、其れ或は喻（たと）へれば、則ち尚其の能く改めて繹ぬるに庶幾（ちか）し。從ふ且つ説ぶ。而して改め繹ねずんば、則ち是れ終に改め繹ねざるのみ。聖人と雖も其れ之を如何。

■法語を正言とし、正言により己を改める。異與は相手が自分を敬してへりくだり立てることで、心地がよいが、その人の行為が口と合うかを見て、その意図に留意すべし、が伝統的解釈である。朱熹は面従でなく己を改めること、直言を喜び、追従の微意を見抜くことを強調した。法は、『爾雅・釋詁』に、「法は常なり」、『礼記・曲礼』に、「謹しみて其の法を修めて審にこれを行ふ」とある。常法、常識であれ、ただ從ふのみにあらず、改めるべきは改める意味もあろう。異は二人並びて舞ふ形、與は与を（與を四人で）かつぐ形、寄り添い共にする形。人はそういふ言葉を喜ぶ。繹は糸がもつれず抽（ぬ）きとられることから、絶えず相連なること、そこから思いたずねるこ

と、尋繹とされた。異與は礼の機能として、人間関係を円滑にする、しかし、追従、面従腹背とは紙一重。その微妙な差を理解しないことに難儀した。「子の曰はく、君に事るに禮を盡くせば、人にて諂へりとす（八佾篇）」。「何晏は、「孔安国曰く、人に過有りて、正道を以てこれに告ぐ。口これに順従せざる無し。能く必ず自からこれを改む。乃ち貴と為す」、「馬融曰く、異は恭なり。恭孫謹敬の言を謂ふ。これを聞きて説ばざる者無し。能く尋繹してこれを行ふを、乃ち貴しと為す」を引いた。■皇侃は、「言ふは、彼の人に過失有り。我法を以て則ちこれに語げ、彼の人法を聞くが若し。當時、口従はざる事無し、而して當に敢へて復た為さざるごときを止む者を云ふ。故に能く従ふこと無きを云ふ。但に、口従ふと雖も、而るに身失を為止まざる者の若し。則ち此れ口従ひて貴を為すに足らず。我貴とする所は、口に在りて従ひ行亦改む者のみ。故にこれを改むを貴と為すと云ふ」、「異は恭遜なり。繹は尋繹なり。言ふは、彼の人有りて遜らずして我謙遜し彼の恭言の與（ま）にす。故に異與之言と云ふ。彼は遜らぬ者にして我言を遜り彼に遜るを得る。彼は必ず亦特（た）に遜を悦びと為す。故に、能く悦ぶこと無きを云ふ。然るに人が己に遜るを悦ぶと雖も、而して己は、此れ遜事を行ふを尋繹すること能はず。是れ悦ぶと雖も貴と為すに足らず。我貴とする所は、遜を行ふを尋繹するに在るのみ。故に、これを繹ぬを貴しと為すと云ふ」、「繹ねず改めず。聖教へざる所。故に孔子云く、これを如何ともすること末し。未無し。孫綽が云く、夫れ形服して心化さずを疾む」とした。■邢昺は、これを受けて、「此の章、行を貴しとす」、「謂ふは、人に過有り、禮法正道の言を以てこれに告げて語る。當時口これに順従せざる者無し。口服従すと雖も、未だ貴しとす可きに足りず。能く必ず自からこれを改む、乃ち貴しと為すのみ」、「異は恭なり。繹は尋繹なり。謂ふは、恭孫謹敬の言を以てこれを教へ與にす。當時これを聞きて、喜説せざる無き者、これを聞きて喜説すと雖も、未だ貴しとす可きに足らず。必ず能く其の言を尋繹してこれを行ふ。乃ち貴しと為す」、「謂ふは、口説び従ふと雖も、而れども行は尋繹して追ひ改めず。夫の形服して心化さずを疾む。故に、これを如何とする末きを云ふ。猶言奈何とす可らず」とした。

zǐ yuēzhǔzhōngxìn wú yǒu bù rú jǐ zhěguò zé wù dǎngǎi
 ○子曰主 忠 信 毋 友 不 如 己 者 過 則 勿 憚 改 子の曰はく、忠信を主とし、己に如かざる者を友とすること毋かれ。過てば則ち改むるを憚ること勿かれ。重出而逸其半。重出して其の半ばを逸す。

■法語の言と雖も、忠信（相手に誠を尽くし、自分を偽らないこと）を旨として、改めるべきは改める。己に如かざる者を友にすれば、直言ではなく異與の言を得て、己の過を見過ごしがちとなる。過を直言する者を友とし、過を改めるに憚ることなくば、人として成長が出来る。そういう流れの中で重出されたのかもしれない。■何晏は、「其の主する所、友とする所を慎しみて、過有れば務めて改む。皆益と為す所以」とした。■皇侃は、「此の事、再出なり。然る所以は、范寧が云く。聖人、物に應じて教を作す。一事時に或は再言す。弟子、師を重ず訓。故に又書して存す」とした。■邢昺は、「此の章、人に忠信にして過を改むことを戒む。主は猶親なり。憚は猶難なり。言ふは、凡そ親狎する所、皆須ず忠信有る者なり。忠信を以て己に如かざる者を友と為すを得ること無し。苟も其の過有れば、改むに難きこと無し。『學而篇』に已に此の文有り。記者、人が異り、故にこれ重出す」とした。

zǐ yuēsānjūn kě duóshuài yě pǐ fū bù kě duózhì yě
 ○子曰三軍可奪 帥 也 匹 夫 不 可 奪 志 也 子の曰はく、三軍帥を奪ふ可し。匹夫志を奪う可からざる。侯氏曰、三軍之勇在人。匹夫之志在己。故帥可奪、而志不可奪。如可奪、則亦不足謂之志矣。侯氏が曰く、三軍の勇は人に在り。匹夫の志は己に在り。故に帥は奪ふ可し、而れども志は奪ふ可からず。如し奪ふ可くれば、則ち亦之を志と謂ふに足らず。

■天子は六軍、三軍は大国の諸侯。帥は三軍を統べる元帥。奪は説文に、「手に持つ隼（とり）、これを失ふ」とあり、ここでは諸侯は、（不適格なら）元帥を取り換へることが出来るの義。匹は対、二つで一つのもの。匹夫は士の下、庶人。孔子の弟子には庶人が多かった。匹夫も志を抱けば、諸侯とてそれを取り換へることはできない。

庶人と雖も志を抱き続けることは、何にも代へがたい大事であるとした。■何晏は、「孔安国曰く、三軍衆しと雖も、人心一に非ずんば、則ち其の將帥奪ふ可し而してこれを取る。匹夫微（かすか）と雖も、苟も其の誌を守れば、得て奪ふ可からず」とした。■皇侃は、「此れ人能く志を守れば獨夫と雖も亦奪ふ可らずを明らかにす。若し其の心堅からずんば、衆しと雖も必ず傾く。故に三軍奪ふ可し。匹夫は回すこと無し。謂ふは、匹夫為る者其の賤を言ふ、但に夫婦は相ひ配匹（配偶）するのみ。又云ふ。古人は質（質素）。衣服は短狭にして、二人が衣裳唯共に一匹を用ふ。故に匹夫匹婦と曰ふ」とした。■邢昺は、「此の章、人が誌を守りて移さずを言ふ。萬二千五百人を軍と為す。帥は將を謂ふ。匹夫は庶人を謂ふ。三軍衆しと雖も、人心一ならずば、則ち其の將帥を奪ふ可し、而してこれを取る。匹夫微なりと雖も、苟も其の誌を守れば、得て奪ふ可らず。士大夫已上は妾媵（嫁に付きそう女）有り。庶人賤しく、但に夫婦相匹配するのみ。故に匹夫と云ふ」とした。

zǐ yuē yì bì yùnpáo yǔ yì hú hé zhě lì ér bù chǐzhě qí yóu yě yǔ
 ○子曰衣敝緼袍與衣狐貉者立而不恥者其由也與 子の曰はく、敝（やぶ）れたる緼袍（うんぽう）を衣（き）て、狐貉（こかく）を衣たる者と立ちて、恥ぢざる者は、其れ由なるか。衣去聲。緼紆粉反。貉胡各反。與平聲。○敝壞也。緼臬著也。袍衣有著者也。蓋衣之賤者。狐貉以狐貉之皮爲裘。衣之貴者。子路之志如此、則能不以貧富動其心、而可以進於道矣。故夫子稱之。衣 yì は去聲。緼 yùn は紆 yū 粉 fěn の反（音と声が合はない）。貉 hú は胡 hú 各 gè の反（音と声が合はない）。與 yú は平聲。○敝は壞なり。緼は臬著（しちよ）なり。袍衣を著（き）る者なり。蓋し衣の賤しき者なり。狐貉は、狐貉の皮を以て裘（きゅう；皮衣）を爲る。衣の貴き者なり。子路が志此の如し。則ち能く貧富を以て其の心を動かさずして、以て道に進む可し。故に夫子之を稱す。

■由は名、子路は字。ボロボロのジャンパーでタキシードのセレブと並んで平然としている。由にしかできないことじゃないか。礼を重んじる孔子にはできかねる。■何晏は、「孔安国曰く、緼は臬著なり」を引いた。■皇侃は、「衣は猶著のごとし。弊は敗なり。緼は臬著なり。狐貉は輕裘（けいきゅう）なり。由は子路なり。當時、人奢華を尚（たつと）ぶ。皆惡衣を以て耻と爲す。唯だ子路能く果敢に素（質素）に率（したが）ふ。敗れた麻の臬著、袍裘を服（き）ると雖も、狐貉、輕裘を服る者と並び立ちて、羞耻（しうち）と爲さず。故に、其れ由なるか、と云ふ。顔延之（384～456 東晉及南朝宋文學家）云く、狐貉緼袍は誠に以て策耻（さくち）すに足らず。然るに自（いや）しくも義を見るに勇非ずんば、或は以て心戰に能く素泰ならず。一 臬麻なり。碎麻を以て著裘なり。碎麻を緼と曰く。故に絮亦緼と曰く。玉藻に曰く、緼、袍を爲すは是なり」とした。■邢昺は、「此の章、仲由を善しとすなり」とし、「緼は臬著なり。緼袍は衣の賤しきもの。狐貉は裘の貴きもの。常人の情、破敗の緼袍を著れば、狐貉の裘を著る者と並び立つは、則ち皆慚恥す。而れども能く恥ぢざるは、唯だ其れ仲由なるか」とした。

bú zhì bù qiú hé yòng bù zāng
 不伎不求何用不臧 伎（やぶ）らず求（むさぼ）らず、何を用（も）てか臧（よ）からざらん。伎之鼓反。○伎害也。求貪也。臧善也。言能不伎不求、則何爲不善乎。此邶風雄雉之詩。孔子引之以美子路也。呂氏曰、貧與富交、彊者必伎、弱者必求。伎 zhì は之 zhī 鼓 gǔ の反（音と声が合はない）。○伎は害なり。求は貪なり。臧は善なり。言ふは、能く伎らず求らずんば、則ち何ぞ善からずと爲すか。此れ邶風雄雉の詩。孔子之を引きて以て子路を美む。呂氏が曰く、貧と富と交はれば、彊き者は必ず伎り、弱き者は必ず求る。

■詩の一節。伎求はねたみ、せがむこと。臧は臧善の意、德行せば臧善す。伎求何用臧、伎求すればどうして臧善しようか。不伎不求ならば、臧善す。子路は野人だが臧善の人。■何晏は、「馬融曰く、伎は害なり。臧は善なり。言ふは、伎害せず、貪り求めずば、何を用てか不善を為さん。貪惡伎害を疾む詩」とした。■皇侃は、「孔子、更に貪惡を疾む詩を引く。子路が徳美を證す。伎は害なり。求は貪なり。臧は善なり。言ふは、子路が人と為り身を害さず。物を貪り求めず。德行此の如し。何を用てこれを善を為すと謂はずや。其れ善を言ふなり」とした。■邢昺は、「伎害也。臧善也。『不伎害、不貪求、何用為不善』言ふは、仲由『不伎害、不貪求、何用為不善』を言ふ。

此れ《詩、邶風、雄雉》の篇、貪悪伎害を疾む詩なり。孔子、これを言ふは、以て子路を善しとすなり」とした。

zǐ lù zhōngshēnsòngzhī zǐ yuēshìdào yě hé zú yǐ zāng
子路終身誦之子曰是道也何足以臧

子路身を終ふるまで之を誦す。子の曰はく、是の道や、何ぞ以て臧しとするに足らん。終身誦之、則自喜其能、而不復求進於道矣。故夫子復言此以警之。○謝氏曰、恥悪衣悪食、學者之大病。善心不存、蓋由於此。子路之志如此。其過人遠矣。然以衆人而能此、則可以爲善矣。子路之賢、宜不止此。而終身誦之、則非所以進於日新也。故激而進之。身を終ふるまで之を誦すは、則ち自ら其の能を喜びて、復道に進むを求めず。故に夫子復此を言ひて以て之を警む。○謝氏曰く、悪衣悪食を恥ずるは、學者の大病なり。善心存せざること、蓋し此に由る。子路の志此の如し。其の人に過たること遠し。然れども衆人を以て此を能くせば、則ち以て善しとす可し。子路の賢、宜しく此に止らざるべし。而して身を終ふるまで之を誦すは、則ち日新に進む所以に非ず。故に激して之を進む。

■不伎不求は素晴らしい。しかし、これに過ぎると危うい、どうして臧善に足りよう。過ぎたるは及ばざるがごとし。■何晏は、「馬融曰く、臧は善なり。尚（いま）だ復して是より美なる者有り、何ぞ以て善と爲るに足らん」を引いた。■皇侃は、「子路、孔子の己が才を美（よ）しとすを得て以て美と爲す。故に、終身「不伎不求何用不臧」の言を長誦すなり」、「孔子、子路がこれを誦して止まざるを見る。故にこれを抑ふ。言ふは、此れ「不伎不求」は乃ち是を道とす可き、亦、何ぞ過ぎて善を爲すに足る。而るに汝これを誦して止まざるや。言ふは、尚だ復して此の者に勝ること有るなり。顔延之云く、其れ善を伐つを懼る」とした。■邢昺は、「子路、夫子の己を善しとすを以て、故に、常にこれを稱誦す」、「孔子、子路これを誦して止まざるを見て、其れ善を伐つを懼る。故にこれを抑ふ。言ふは、人の行尚だ復して是の者に美有り。此れ何ぞ以て善を爲すに足る」、「《玉藻》に云く、『纁は繭を爲し、緇は袍を爲す』。鄭玄云く、『衣有著の異名なり。纁は今の新綿を謂ふ。臬は今の纁及び舊絮を謂ふ』、然して則ち今云ふ臬著は、雑用の臬麻以て著袍なり」とした。

zǐ yuēsuì hánrán hòuzhī sōng bó zhī hòudiāo yě
子曰歳寒然後知松柏之後彫也

子の曰はく、歳（とし）寒くして、然る後に松柏の彫（しば）むに後（おく）るることを知る。范氏曰、小人之在治世、或與君子無異。惟臨利害、遇事變、然後君子之所守可見也。○謝氏曰、士窮見節義、世亂識忠臣。欲學者必周於德。范氏が曰く、小人の治世に在る、或は君子と異なること無し。惟だ利害に臨み、事變に遇ひて、然る後に君子の守る所を見る可し。○謝氏が曰く、士窮して節義を見（あら）はし、世亂れて忠臣を識る。學者は必ず徳に周（あまね）かんことを欲す。

■彫は、ここでは凋、なえてしばむ、勢いが衰えること。歳寒は厳冬、逆境の人生。五十にして天命を知るも、晩年の孔子は、宰相に求む諸侯なく、顔回、子路を失ひ、「天、予を喪（ほろぼ）せり」と凋された。しかし、志のままに生きられた。■何晏は、「大寒の歳、衆木皆死す。然る後に松柏の小し彫み傷むことを知る。平歳則ち衆木亦死せざる者有り。故歳寒を須（ま）ちて而して後にこれを別つ。凡人、治世に處りて亦能く自ら脩整す。君子と同じく濁世に在りて、然る後に君子の正しき苟も容れざるを知るに喩ふ」とした。■皇侃は、「此れ君子が徳性と小人と異なることを明らかにすを欲す。故に、松柏を以て君子に匹（たぐひ）す。衆木を小人に偶（あは）す。言ふは、君子と小人、若し聖世に同居せば、君子が性本より自ら善し。小人服従、教化さる。是れ君子と小人並びて悪を爲さず。故に堯舜の民、屋を比（なら）べ封ず可し。松柏と衆木と同じく春夏に處るが如し。松柏に心有り。故に本より蓊鬱（おういつ；盛んに茂る）す。衆木時に従ふ。亦其の茂美を盡すものなり。若し無道の主に至れば、君子が秉性（へいせい；本性）回（もど）ること無し。故に悪を爲さず。而して小人、復た忌み憚ること無し。即ち世に隨ひ變改す。桀紂の民。屋を比べ誅す可し。譬へば、松柏と衆木と同じく秋冬に在るが如し。松柏は柯（えだ）を改め葉を易（かへ）ず。衆木は枯れ零（お）ち先に盡きる。而して此れ歳寒を云ひ、然る後に松柏凋（しば）むに後るることを知るは、就（まさ）しく平叔（何晏）の注意の如し。若し平歳の寒の如くば、衆木猶不死有るがごとし。致

別すに足らず。平世の小人が如し。亦、修飾有りて變らざる者。唯だ大寒歳ならば則ち衆木皆死す。大亂ならば則ち小人悉く惡をなす。故に歳寒と云ふ。又、然る後に松柏後凋むに後ること知る者と云ふ。後に時の目を俱にすに非ず。凋は枯死の名に非ず。大寒の後を言ふ。松柏の形小しく凋衰す。而して心性猶存すがごとし。君子の人の如し。積惡に遭値（**出会**）し、外に闇世逼（**せま**）る。不得不（**やむを得ず**）遜跡（**隠居**）して時に隨ふ。是れ小凋なる。而して性猶變らざるがごとし。松柏の如きなり。而して琳公曰く、夫れ歳寒、別木別土に遭困す。寒さ厳しく霜降りて松柏の後凋を知る。凡木に異なるを謂ふ。亂世に遭ひて、小人自ら變ず。君子其の操を改めず」とした。■邢昺は、「此の章、君子に喩ふ。大寒之歳、衆木皆死す。然して後に松柏の小しく彫傷すを知る。若し平歳ならば、則ち衆木亦不死せざるもの有り。故に、歳寒にして後にこれを別つ須（**べ**）し。喩へば、凡人、治世に處りて亦能く自ら脩整す。君子と同じ。濁世に在りて、然して後に、君子の正しき苟も容れざるを知る」とした。

zǐ yuē zhīzhě bú huò rénrzhě bù yōuyǒngzhě bú jù
 ○子曰知者不惑仁者不憂勇者不懼 子の曰はく、知者は惑はず。仁者は憂へず。勇者は懼れず。明足以燭理。故不惑。理足以勝私。故不憂。氣足以配道義。故不懼。此學之序也。明は以て理を燭らすに足れり。故に惑はず。理は以て私に勝つに足れり。故に憂へず。氣は以て道義を配するに足れり。故に懼れず。此れ學の序なり。

■歳寒は逆境、そこで人は惑い、憂へ、懼れる。孔子は、この言葉を自らに言い聞かせて、晩年の逆境に立ち向かはれたのであろう。朱熹は、伝統的解釈に、理気の論を導入し、「私」に勝つことを強調した。■何晏は、「包氏曰く、惑亂せず」、「孔安国曰く、憂患すること無し」、「孔安国曰く、畏懼すること無し」を引いた。■皇侃は、「此の章、人の性分不同からずを談ず」、「智は照了（**徹見、洞曉**）を以て用と爲す。故に、事に疑惑無し。故に孫綽云く、智は能く物を辨（**わか**）つ。故に惑はず」、「憂患や、仁人常に救済すを務と爲す。（**いまだ**）嘗て物を侵さず。故に、物の侵患さるを憂へず。孫綽云く、仁に安んじ其の楽しみを改めず。故に憂無し。一 内省して疾（**や**）まず。故に憂患無し」、「勇は多力を以て用と爲す。故に、前敵に怯懼すること無し。繆協云く、義を見て而して強禦（**きょうぎよ**；**悪強くて善を受け付けない**）を畏れずと爲す。故に懼れず」とした。■邢昺は、「此の章、知者事に明らかなことを言ふ。故に不惑亂せず。仁者は命を知る、故に憂患無し。勇者は果敢、故に恐懼せず」とした。

zǐ yuē kě yǔ gòngxuéwèi kě yǔ shìdào kě yǔ shìdàowèi kě yǔ lì kě yǔ lì wèi kě yǔ quán
 ○子曰可與共學未可與適道可與適道未可與立可與立未可與權 子の曰はく、與に共に學ぶ可し。未だ與に道に適く可からず。與に道に適く可し。未だ與に立つ可からず。與に立つ可し。未だ與に權（**はか**）る可からず。可與者、言其可與共爲此事也。程子曰、可與共學、知所以求之也。可與適道、知所往也。可與立者、篤志固執而不變也。權稱錘也。所以稱物而知輕重者也。可與權、謂能權輕重使合義也。○楊氏曰、知爲己、則可與共學矣。學足以明善、然後可與適道。信道篤、然後可與立。知時措之宜、然後可與權。洪氏曰、易九卦、終於巽以行權。權者聖人之大用、未能立而言權、猶人未能立而欲行、鮮不仆矣。程子曰、漢儒以反經合道爲權。故有權變權術之論。皆非也。權只是經也。自漢以下、無人識權字。愚按先儒誤以此章連下文偏其反而、爲一章。故有反經合道之說。程子非之是矣。然以孟子嫂溺援之以手之義推之、則權與經亦當有辨。與にす可しは、言ふは、其れ與に共に此の事を爲す可きなり。程子の曰く、與に共に學ぶ可しは、之を求むる所以を知るなり。與に道に適く可しは、往く所を知るなり。與に立つ可しは、篤く志し固く執りて變ぜざるなり。權は稱錘なり。物を稱（**はか**）りて輕重を知る所以の者なり。與に權る可しは、能く輕重を權り義に合わせしむを謂ふなり。○楊氏が曰く、己が爲にすることを知らば、則ち與に共に學ぶ可し。學以て善を明らかにするに足りて、然して後に與に道に適く可し。道を信ずること篤くして、然して後に與に立つ可し。時措（**お**）くの宜しきを知りて、然して後に與に權る可し。洪氏が曰く、易の九卦、巽は以て權を行ふに終へて、權は、聖人の大用、未だ立つこと能はずして權を言ふは、猶

人の未だ立つこと能はずして行かんと欲するがごとし。仆れざること鮮し。程子の曰く、漢儒は經に反きて道に合ふを以て權と爲す。故に權變（臨機応変）權術（權謀術数）の論有り。皆非なり。權は只是れ經なり。漢より以下、人、權の字を識る無し。愚按ずるに、先儒の誤りて此の章を以て下の文偏として、其反に連ねて、而るに一章と爲す。故に、經に反きて道に合ふ説有り。程子、之を非とす。是なり。然れども孟子の嫂溺るに之を援くるに手を以てすの義を以て之を推せば、則ち權と經とは亦當に辨有るべし。

■天と共に生きているはずが、天が自分を喪（ほろ）ぼせりと嘆じた孔子。天は天、己は己、デルフォイの「汝自身を知れ」。己を生きよ。■何晏は、「適は之（ゆく）なり。學ぶと雖も、或は異端を得。未だ必ずしも能く道に之かざる」、「能く道に之くと雖も、未だ必ずしも能く立つ所有らず」、「能く立つ所有りと雖も、未だ必ずしも能く其の輕重の極を權量することあらず」とした。■皇侃は、「夫れ正道行ひ易し。事を權ること達し難し。既に權を明らかにせんと欲す。故に、先に正に従ひ起す。道は謂所學の道なり。言ふは、凡人乃ち與に師門に同じく處り、共に學ぶ可きのみ。既に未だ彼の性を得ず。則ち未だ便（まさ）しく友と爲して其の志の適く所の道を與にす可らず。一 異端は正典に非ず。人各（おのおの）自ら性有り。彼或は寧じて正道を學ぶこと能はず。而して唯に能く史子を讀む。故に未だ便しく正道にこれを與にこれを共にす可らず」、「立は謀議の立つ事を謂ふ。亦人の性は各異なる。或は能く學問すれども未だ必ず能く世の中の正しき事を建立する者ならず。故に與に共に學ぶ所の道を適く可し。而れども未だ便しく與に共に事を立つ可からず」、「權は常に反して道に合ふものなり。變に通じ理に達すに非ずにより、則ち能はざる所。故に、共に正しき事に立つ可しと雖も、而れども未だ便しくこれと與に權を爲す可からず。故に、王弼曰く、權は道の變。變は常無きの體。神にして明、之其れ人に存りや。豫め設く可からず。尤も至ること難きものなり。一 能く輕重を權量す。即ち是れ曉權なり。張憑（字は長宗、呉都の人、吏部郎、御史中丞。梁有司徒左長史、東晋司徒左長史）云く、此れ言ふは、學ぶ者階級の次を漸進するのみ。始め學に志す。其の蒙を發すを求む。而れども未だ適く所審（つまひら）かならず。既に方向へり。而れども道を信ずこと未だ篤からず。則ち立つ所未だ固からず。又既に固し。又未だ變通の權に達せず。明知に反して道に合ふは、則ち日勸の業、麴糞（びび；倦まず弛まず）の功。其れ此に幾きか」とした。■邢昺は、「此の章、道を權ることを論ずなり」、「適は之なり。言ふは、人與に共に學ぶ可しと雖も、學ぶ所或は異端を得。未だ必ずしも能く正道を之かず、故に未だ與にす可べからず」、「言ふは、人能く道に之くと雖も、未だ必ずしも能く立つ所有らず、故に未だ與にす可からず」、「言ふは、人能く立つ所有ると雖も、未だ必ずしも能く時に隨ひ變通し其の輕重を權量す極にあらず」とする。

táng dì zhī huá piān qí fǎn ér qǐ bù ěr sī shì shì yuǎn ér
 ○唐棣之華 偏其反而 豈不爾思 室是遠而 唐棣（とうてい）の華、偏として其れ反せり。豈に爾を思はざらんや。室是れ遠ければなり。棣大計反。○唐棣郁李也。偏晉書、作翻。然則反亦當與翻同。言華之搖動也。而語助也。此逸詩也。於六義屬興。上兩句無意義。但以起下兩句之辭耳。其所謂爾、亦不知其何所指也。棣 dì は大 dà 計 jì の反。○唐棣は郁李（いくり、庭梅）なり。偏は晉書に翻に作る。然れば則ち反も亦當に翻と同じかるべし。言ふは、華の搖動するなり。而は語の助なり。此れ逸詩なり。六義に興に屬す。上の兩句意義無し。但以て下の兩句を起こす辭のみ。其の謂ふ所の爾は、亦其れ何ぞ指す所を知らず。

■伝統的には上記と一連で、權と関連づけて積されるが、程子や朱熹は別個とし、「仁遠からんやの意なり」とした。詩經の唐棣之華（何彼禮矣）をもじり、「偏其反而豈不爾思室是遠而子曰未之思也夫何遠之有」を付した当時の流行歌。当時の流行であった鄭声を嫌った孔子は、嫁ぐ姫への祝頌の歌である唐棣之華の趣きを、遠く逢えない女への恋心にすり替えた歌に不快感を示され、共に權らずとされたのであろうか。■何晏は、「逸詩なり。唐棣は移なり。華反して後に合ふ。此の詩を賦して以て言ふ。道を權ることは反りて後に大順に至る。其の人を思ひて見ること得ざるは、其の室遠ければなり。以て言ふ、權を思ひて見ること得ざるは、其の道遠ければなり」とした。■皇侃は、「權を明らかにする逸詩を引きて以て權を證す。唐棣は棣樹なり。華は花なり。夫れ樹木の花皆先に合ひて後に開

く。唐棣の花則ち先に開きて後に合ふ。譬へれば、正道則ちこれを行ひて次有るが如し。而れども權の用と爲すは先に反る。後に大順に至る。故に、偏（もはら）其の反を云ふのみ。言ふは、偏は明らかに唯に其の道偏（もはら）常と反すなり」、「言ふは、凡て其の人思ふ、而れども見ること得ざるは、其れ居室遼（はる）か遠き故なり。人豈に權を思はざる。道を權るは玄邈（げんぱく；奥深く深遠）。其の室奥遠が故の如し。一 初め逆らひて後に従ふ。一 前釋の如し」とした。■邢昺は、「此れ逸詩なり。唐棣は移なり。其の華偏然として反りて後に合ふ。此の詩賦すは、以て道を權ること亦先に常に反りて後に大順に至るを言ふ」、「言ふは、誠に爾を思ふなり。誠に其の人を思ひて見ることを得ずは、其の室遠からんなり。以て權を思ひて不見ること得ざるに喩るは、其の道遠からんなり」とした。

zǐ yuē wèi zhī sī yě fú hé yuǎn zhī yǒu

子曰未之思也夫何遠之有 子の曰はく、未だ之を思はざるなり。夫れ何の遠きことか之有らん。夫音扶。○夫子借其言而反之。蓋前篇仁遠乎哉之意。○程子曰、聖人未嘗言易以驕人之志。亦未嘗言難以阻人之進。但曰未之思也、夫何遠之有、此言極有涵蓄、意思深遠。夫 fú は音扶。○夫子其の言を借りて之を反す。蓋し前篇の仁遠からんやの意なり。○程子の曰く、聖人未だ嘗て易きを言ひて以て人の志を驕らしめず。亦未だ嘗て難きを言ひて以て人の進むことを阻てず。但に曰く、未だ之を思はざるなり。夫れ何の遠きことか有らん。此の言極めて涵蓄（含蓄）有り、意思深遠なり。

■何晏は、「夫れ思ふは、當に其の反を思ふがごとし。反是れ思はず、遠きと為す所以。能く其の反を思はず。何の遠きこと之有る。言ふ權は知る可し。唯に思ふことを知らざるのみ。之を思ふこと次序有り。斯れ知りぬ可し」とした。■皇侃は、「又、孔子の言を引きて、權思ふ可きことを證す。言ふは、道を權るは思ひ易し。但に未だこれを思ふ者有らざるのみ。若し道に反りてこれを思はば、則ち必ず得可し。故に、云夫れ何の遠きことか之有らん」とした。■邢昺は、「言ふは、夫れ思ふは、當に其れ常に反すを思ふ。若し、是の反を思はずば、遠きと為す所以。能く其の反を思はば、何の遠きことか之有らん。言ふは、權知る可し。唯に爾を思ふこと知らず。儻（もし）能くこれを思へば（たちまち）次序有り、斯れ知る可し。記者、詩言と相亂るを嫌ふ。故に重ねて“子曰”と言ふ」とした。○注“唐棣は移なり”。○正義曰く、『釋木』文なり。舍人曰く、『唐棣一名移』。郭璞曰く、『白楊に似て、江東では夫れ移と呼ぶ』。『詩・召南』に云く、『唐棣之華』。陸機云く、『奥李なり。一るは雀梅と名づく、亦車下李を曰ふ。山在る所皆其の華有り。或は白く或は赤し。六月中に熟し、大きき李子の如し。可食。』

了 2016. 12. 24